

平成22年度 地域伝統文化総合活性化事業
高槻・山岳地域に伝わる文化を活性化・発信し、継承する事業に
係る調査・支援等委託事業

～ノハラボたかつき～

【調査等報告書】

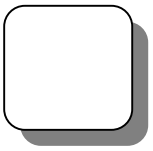
平成23年3月

特定非営利活動法人ノート

作成協力：ランドブレイン株式会社

目 次

本事業の背景と目的	2
1. 高槻市山岳地域の概要	3
2. 本事業の背景と目的	6
(1) 本地域の伝統文化に関する課題	6
(2) これまでの取り組み	6
(3) 本事業の目的とねらい	6
本事業の取り組み内容と目標	7
1. 本事業の取り組み内容	8
(1) 高槻市山岳地域の伝統文化実態調査	8
(2) 高槻市山岳地域の伝統文化活用計画の検討	8
(3) 「わくわくプレスクール」の実施によるモニタリング調査	8
(4) 文化財の価値を広く周知するパンフレットの作成	8
2. 各取り組みの関係	9
各取り組みの実施結果と成果	10
1. 高槻市山岳地域の伝統文化実態調査	11
(1) 文献調査・現地調査概要で把握した本地域の文化財概要	11
(2) ヒアリング調査概要	16
2. ノハラボたかつき検討委員会	20
(1) ノハラボたかつき検討委員会の構成	20
(2) ノハラボたかつき検討委員会での検討概要	21
(3) 委員会各回の記録	24
3. わくわく探検隊	46
(1) 火渡り体験	46
(2) 原ハラ歴史調査隊 in しろあと歴史館見学と原ハラ歴史調査バトル ..	50
(3) 原ハラ歴史調査隊 in 神峯山寺 と ところ天体験	56
今後の取り組み方向	62
1. 将来ビジョン	63
2. 活動方向	64
(1) 子ども・青少年への教育効果を高める	64
(2) 地域活性化につなげる	64
(3) ウェブを最大限活用したプロモーション戦略の展開	64
3. 具体的な取り組み予定と対応する課題	65
(1) 次年度以降の取り組み予定	65
(2) 次年度以降対応していく取り組み課題	65



本事業の背景と目的

1. 高槻市山岳地域の概要

高槻市の北部の山岳地域(以下「本地域」と言います。)は、山岳信仰の隆盛とともに麓に村々が形成され、1300年以上の歳月をかけて独特の地域伝統文化が育まれてきた地域です。

特に、北摂三山と言われる神峯山寺、本山寺、安岡寺を中心とした本地域内にある山岳寺院は、この地域の伝統的な祭礼行事や芸能のなりたちに大きな役割を果たしてきました。

また、これらの山岳寺院と関わりのある史跡や遺構も本地域内に数多く点在しています。

対象地域



参考: 高槻市景観基本計画(H21)

高槻市北部の山岳地域の主な資源一覧

分野	名称	概要等
歴史・文化資源	神峯山寺 本山寺 安岡寺	<p>北摂三山寺と称される天台宗の仏教寺院。</p> <p>《行事》</p> <p>(共通)・勸請掛: 正月初寅の日の年占に用いられる行事 [参考資料 P19 参照]</p> <p>(神峯山寺)・初寅会: 本尊・毘沙門天より一年間の無病息災、家内安全、商売繁盛を頂戴する行事。修験者による「大護摩供」と「火渡りの神事」などを実施。</p> <p>・稚児行者行列: 初寅会で、通常の大護摩供に加え、子どもの健やかな健康を祈願。</p> <p>・坐禅会: 本質的な日本伝統文化を広く発信すべく、不定期で日本や海外の若者に対して座禅会を開催。楽しみ、親しみながら座禅を体験。</p> <p>(本山寺)・初寅会 (安岡寺)・大護摩供(初寅会と類似)</p>
	八阪神社	<p>祭神として須佐之男命(農業神、防災徐疫の神)を祀る。</p> <p>《行事》</p> <p>・蛇祭り: 稲藁の大綱(大蛇)を一日がかりで作成し、祭り当日、若者衆が担いで神社に奉納し、大綱の目に見立てた的を大綱(大蛇)の下に掛ける。矢執りの少年が矢を弓引きの青年に渡し、一人二回づつ放ち、最後は空に向けて放つ。原地区の西條、中村、川東の4つの垣内(集落)が4年に1回、輪番で担当。高槻市の無形民俗文化財。</p>



勸請掛



初寅会



稚児行者行列



坐禅会



大綱作りの様子



大綱運びの様子

	牛地藏	<p>険阻な京都・大阪への荷運びで牛の苦勞を見てきた地元の人達が天保 4 年 (1833) に建立し、牛を供養したもの。</p> <p>[参考資料 P23 参照]</p>	
	原八景	<p>明治 26 年、神峯山寺住職の近藤鶴遷僧正が「原八影之詩」という漢詩で、原地域の八箇所の景観を詠ったもの。</p> <p>[参考資料 参照]</p>	
自然資源	里地里山	<p>高槻市の中心市街地から車で約 20 分の場所に位置するとかいなか(都会に近い里地里山)</p>	
	農地	<p>原地区川東垣内で NPO 法人ノートが管理する農地。</p>	
	たけんど	<p>地元の子どもたちが泳いで遊ぶ、八阪神社近くにある芥川の淵。</p>	
	摂津峡	<p>奇岩や、断崖や滝などが続く渓谷。夫婦岩や八畳岩など主要な岩だけでなく、各岩に名称があるとの話も。</p>	
	ポンポン山	<p>京都市西京区と大阪府高槻市の境界に位置する標高 678.7m の山で、西京区及び高槻市の最高峰。</p>	
住民活動等	畑中農園の取組	<p>どぶろく(H19に高槻・とかいなか創生特区(どぶろく特区)として認定)作り。農繁期等を除き、毎週日曜日に「お休み処 秀」で手打ち蕎麦を販売。</p>	
	原いっぱいマップ	<p>高槻市景観ワークショップの成果。</p> <p>[参考資料 参照]</p>	
公共施設等	原公民館	<p>旧分校。わくわく探検隊の「たかつき里山合宿」等で利用。</p>	
	寒天小屋	<p>高槻の伝統産業・寒天作りの名残で、現在は農機具置場。</p> <p>[参考資料 P9参照]</p>	

2. 本事業の背景と目的

(1) 本地域の伝統文化に関する課題

本地域内の集落では高齢化が著しく進行しており、これらの有形・無形の地域伝統文化を維持することが困難になっています。さらに、本地域内の地域伝統文化の価値は、観光・教育等いずれの面でも十分に活用・周知されているとは言い難く、地域住民以外の新たな主体が地域の活動に関わり、その維持・保全を担う可能性も現状では低くなっています。

(2) これまでの取り組み

NPO法人ノートでは、高槻市の山岳地域内にある原地区において、子どもたちに日ごろ体験できない自然体験の場をつくり、自然の恵みや摂理について学ぶ「わくわくファーム」事業を展開してきました。

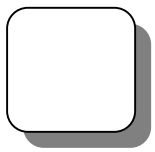
原地区での活動を通じて、地域の豊かな自然や歴史文化が、地域の人々の営みや、つながり・関わりの中で守られていることを子どもたちに伝えることができました。

また、地域の人々の間においても、子どもたちに学びの場を提供することや、今までとは異なる形で地域外の人々との関わり・交流を持ち、地域の資源を活性化することが、地域の豊かな自然や歴史・文化を未来に渡り守り続けることへとつながるとの認識が広がりはじめました。

(3) 本事業の目的とねらい

本事業は、高槻市北部の山岳地域にある地域伝統文化を、未来に向けて継承するための持続可能な仕組みをつくりだすことを目的として実施したものです。

本事業では、本地域の伝統文化の発展に中核的な役割を果たしてきた社寺等と連携しながら、NPO法人ノートのこれまでの子どもたちと地域の人々との活動を活かし、調査や体験学習プログラムの開発・実施、今後の本地域の文化財を活用した地域活性化のあり方の検討等の活動を行いました。これらの活動は、地域内の文化財の維持・保全に向けた担い手の育成や、本地域その価値を多面的に発信する活性化を図るものです。



本事業の取組み内容と目標

1. 本事業の取組み内容

(1) 高槻市山岳地域の伝統文化実態調査

本地域内の文化財の存在と、そのなりたち等を把握するために、文献調査、現地調査を行いました。対象は、史跡、遺構、街道、社寺等の山岳にある行場などの他、本地域内の伝統的な祭礼行事や芸能等です。

また、本地域内の社寺関係者や、集落内の地域住民を対象に、本地域に伝わる風習や誠意活文化、歴史的資源にまつわるエピソードや伝説、なりたちなどをヒアリング調査しました。

ヒアリング調査の際には、市内の児童や「高槻市山岳地域の伝統文化活用計画検討委員会」の専門家も参加しました。

(2) 高槻市山岳地域の伝統文化活用計画の検討

有識者、本地域内の社寺関係者、地域住民、教育関係者、観光関係事業者、行政等で構成する検討委員会を立ち上げ、本地域内の文化財の活用方法や、関係主体の行動計画、連携体制等に関する「(仮称)高槻市山岳地域の伝統文化活用計画」を検討しました。

(3) 「わくわくプレスクール」の実施によるモニタリング調査

本地域内の文化財に、児童が親しみ、自然環境の摂理を学んだり、住んでいる地域に対する誇りを育んだりできる体験学習プログラムを開発し、実験的に実施する事業「わくわくプレスクール」を実施しました。

「わくわくプレスクール」は、「高槻市山岳地域の伝統文化活用計画」において検討する、本地域内の文化財の活用方法を実際に展開していくためのモニタリング調査として実施しました。モニタリング調査は、本格展開に向けて、どのような課題が生じるか、プログラムに対してのニーズが確認できるか等を検討しました。

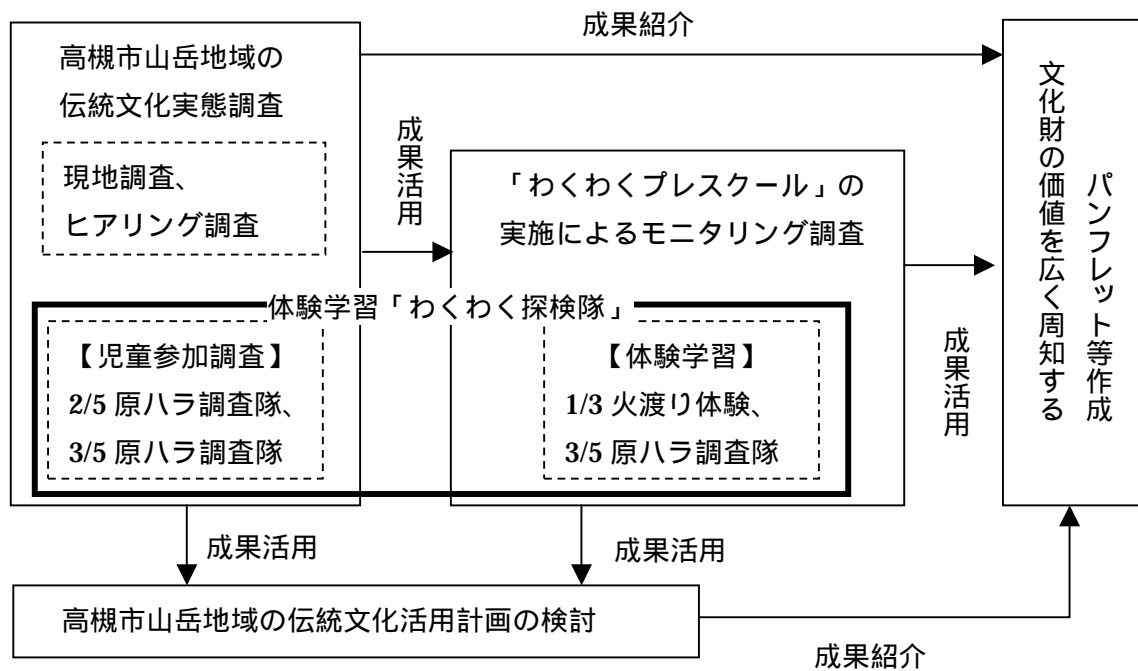
(4) 文化財の価値を広く周知するパンフレットの作成

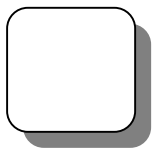
「【1】高槻市山岳地域の伝統文化実態調査」の成果をもとに、高槻市内外の幅広い方に、本地域の文化財の魅力を周知し、親しんでもらうためのパンフレットを作成します。

パンフレットは、本地域内の文化財の位置や歴史的・文化的価値を整理するとともに、地域住民の方等から把握されたエピソードや伝説、なりたちなどをまとめます。

2. 各取り組みの関係

本事業で実施した各取り組みの関係は、以下の図のとおりです。





各取組みの実施結果と成果

1. 高槻市山岳地域の伝統文化実態調査

(1) 文献調査・現地調査概要で把握した本地域の文化財概要

指定文化財

本地域内にある指定文化財は以下のとおりです。

	種類	種別 / 区分		名称	所有者・管理者	
国指定 登録	有形文化財	重要文化財	彫刻	木造 聖観音立像 2 軀	神峯山寺	
				木造 阿弥陀如来坐像	神峯山寺	
				木造 聖観音立像	本山寺(奈良国立博物館寄託)	
				木造 毘沙門天立像	本山寺	
				木造 千手観音坐像	安岡寺	
府指定	有形文化財	美術 工芸品	工芸品	本山寺 石造 宝篋印塔	本山寺	
			考古資料	八阪神社 石槽	八阪神社	
市指定	有形文化財	美術 工芸品	彫刻	木造 不動明王立像	本山寺	
			古文書	本山寺文書 2 巻	本山寺(高槻市寄託)	
	民俗文化財	有形民俗文化財	信仰	成合春日神社 雨乞祭具一式	成合春日神社	
			無形民俗文化財	風俗慣習	磐手社神社の神輿渡御神事	磐手社神社神渡御神事保存会
					八阪神社の春祭歩射神事	八阪神社春季大祭(大蛇祭)保存会

「時間軸」で把握した本地域の文化財

本地域内の伝統的祭礼や行事、生活文化等を、1年間の「時間軸」で以下のとおりに把握・整理しました。

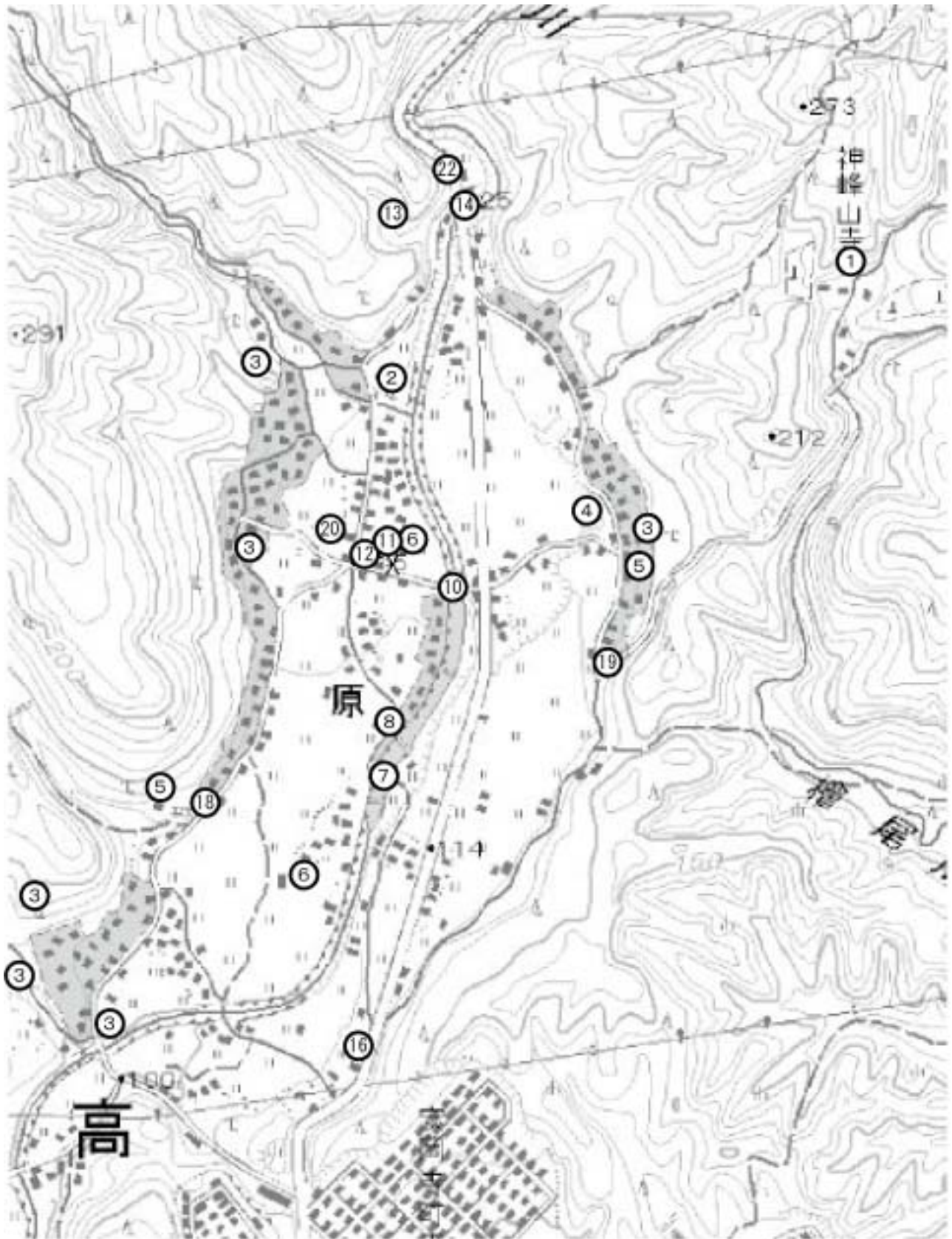
	家庭歳事	八阪神社	神峯山寺	本山寺	浄園寺
1月	氏神の初詣 神棚・仏壇 七草粥 神棚・仏壇灯明 とんど焼き 小正月 小豆粥	とんど焼き 歳旦祭 とんど焼き 月次祭	年始参拜 初寅会 大護摩会	修正会初護摩供 初寅会 毘沙門供 大護摩供 節分厄除け護摩供	修正会 初寅会 大護摩供 法話会
2月	節分 豆まき	節分祭 とんど焼き		第二日曜日 例祭 護摩供	涅槃会
3月	彼岸 墓参り		春季彼岸会	第二日曜日 例祭 護摩供 彼岸会	彼岸法要
4月	第一日曜日 各垣内提灯 を建てる	第一日曜日 春季 大祭 蛇祭り			
5月	苗代 最終日曜日 全村用水路 清掃 用水はじまる	月次祭(かしわ餅お 供え)	護持会	第二日曜日 宇賀 神弁才天大法要	
6月	田植え			第二日曜日 例祭 護摩供	
7月			宇賀神主のお祭り	第三日曜日大峰満 行報告護摩供 第一日曜日孟蘭盆	
8月	墓地清掃 墓参り 灯明 盆踊り・文化展 地蔵盆 5垣内氏子参拝(八阪神)	八朔祭(収穫祈願)	施餓鬼会	第二日曜日施餓鬼 法要 彼岸会	施餓鬼法要 原各垣内檀家棚行
9月	西条 八幡宮御灯明 敬老の集い(原公民館) 彼岸 墓参り		秋季彼岸墓前回向 秋の写経会 秋季大般若経輪読	第二日曜日 大般 若経輪読祈願法要	秋季彼岸法要
10月	各垣内御灯明 稲刈開始 灯明 そば等収穫	秋季大祭 献湯祭		もみじ祭	
12月	カンザ祭礼 餅つき 大掃除 神棚・仏壇 大晦日 灯明 八阪神社・寺院に参拝	注連縄作り	勧請掛替 大晦日 除夜の鐘	勧請掛 大晦日	第一土曜日 餅つ 第一日曜日 十夜 大晦日



本山寺の火渡りのようす

「空間軸」で把握した本地域の文化財

本地域内の史跡、遺構、街道、社寺等の山岳にある行場等を、以下のマップに把握・整理しました。



番号	名称	概要
	神峯山寺	北摂三山寺の一つである天台宗の仏教寺院。山号は根本山。本尊は毘沙門天。新西国三十三箇所第十四番札所。役行者霊蹟札所。日本最初の毘沙門天安置の霊場と言われている。秋には紅葉の名所として知られる。
-a	勧請掛け	原に在住は神峯山寺の檀家20家が毎年12月23日の午前8時頃に集い作業に掛かり、午後2時ごろに仕上がる。作業は男衆に限り家族も一日山内の清掃などを行う。密を掛けるのは12本で縄と密の垂れ具合により農作物、特に米の豊凶を占った。江戸時代に堂島の米商人達が年に何度も参拝に来たという。堂島から舟で三島江に上がり、芥川沿いに、寺まで来た。その道標は鴻池が16ヶ所に建てた。堂島の米商人の参拝に随行して曾根崎新地の男衆も参加した。本山寺でも同日に同じ段取りで行われた。当寺も檀家がないので、原と川久保の有志により永年行っている。掛ける縄は正12本(12ヶ月)であり、参拝者は神峯山寺と同じ塔には金剛界四仏が彫られ、基台(明治以後に原(西条?)の寺から移されたといわれる。)には、羅漢講を信仰する人達が供養するために造立されたと刻まれている(観応2年 - 1351年)。観音堂の北側にもあり、貞和3年(1347)と刻まれ、金剛界四仏が刻まれている。↓
-b	宝覆印塔	4面に梵字が刻まれていて、造塔による功德を祈願した供養塔という。
-c	五輪塔	4面に梵字が刻まれていて、造塔による功德を祈願した供養塔という。
-d	笈掛石	役行者が葛城山より飛来した折に背負ってきたものを、この石に掛け置いたという石。(笈研学の徒が書などを納め、背負って運んだ箱)
-e	仁王門	寺伝によると元は二十の構造の門であったという。太治2(1127)年の建築にして運慶の作による二天王像は木造桧材の寄木造で元は彩色が施されていた。門の表面上に墓股表の虎、裏側上には墓股の竹が懸かっている。仁王門の頭上の表裏に毘沙門天の使いである虎と竹が彫られた木版が懸かっている。虎のいるところは竹藪との事で表裏を分けている。彩色は平安時代の漢学者小野篁の書いたのを彫ったもの。
-f	下馬石	仁王門を潜るとすぐ左右にあり、阿呼の石といわれ、役行者の藍婆・毘藍婆のために立てた
-g	二王石	神峯山寺の本尊で、日本最初の毘沙門天と言われる。役小角が葛城山で修行をしている時、北の山から黄金の光が発せられたのを見て、靈感を感じ神峯山寺が位置する場所にやって来たという。そこで一人の天童(金毘羅童子)に会い天童の霊木で、四体の毘沙門天を刻みこまれ、毘沙門天が現れそれを祀ったのが、寺の起源であると伝えられる。
-h	毘沙門天	神峯山寺の本尊である毘沙門天の像の基となった霊木を守っていた鬼。神峯山寺内に藍婆・毘藍婆が姿を変えたといわれる石がある。
-i	金毘羅	役小角が神峯山寺を開いた際に現われた天童(金毘羅童子)。
-j	九頭龍滝	神峯山寺が開かれたときからあると伝えられている滝。行場でもあり、修行する行者の守り本尊として不動明王が奉られている。
-k	お百度石	神峯山寺の境内にあるお百度参りする際に触る石。
-l	藍婆・毘藍婆	神峯山寺の本尊である毘沙門天の像の基となった霊木を守っていた鬼。神峯山寺内に藍婆・毘藍婆が姿を変えたといわれる石がある。
	八阪神社	スサノノミコトを祭神とし、社記によると、清和天皇の頃(9世紀後半)、疫病が流行したため、牛頭天王(ごずてんのう)を迎えたのがはじまりといわれる。主な祭礼として、春に行われ八阪神社の中にある石槽。昔の石風呂との説もあり、芥川の教宗寺の石槽とともに、府の有形文化財に指定されている。
-a	石槽	「カンザ」又は「カンザン」と呼ばれ、8人衆とその流れに近いと思われる家の11家が、屋敷内かそれぞれの裏山などに一家で祀るか、2~3家で石組や祠を造営し、それぞれで祀っている。祭礼は毎年12月23日の早朝から行われ供物は赤飯・御頭(鯛・目刺)・芋・大根・人参・油揚げなどを折紙にのせ、別の酒も供えることがある。T家では宮大工の家系でもあり、屋敷の裏側に祠のある台座を石組し、祠も匠の技能で造営された。
	屋敷神「カンザ」	原盆地の西側、西条垣地の裏山は横山といわれ、その頂上の平坦地に大きな岩石がある。43代元明天王(707~715年)の和銅年間に播磨の霊山から素盞鳴尊を横山天神の嶺に招き、岩を祭神としたことによる。今は登山参道も雑木に塞がれ参拝は困難、西条・中村・旧東条に屋敷神のように祀られていると聞か場所は不明である。
	横山天神	浄土宗西山派禅林寺の末寺。本尊は阿弥陀仏。龜山天皇の文永6(1264)年の開山。元は堂之前峠の下の芥川沿いにあったが延実年中(1673~80年)に出水により悉く流失したと伝わる。元禄16(1703)年現在地へ仮造営され、文久2(1823)年に本堂が次いで書院も建立された。高槻藩主・永井直清は祖母宝樹院禅尼の百回忌を当山で執行し寺領を与えた。
	浄園寺	原に残る二軒の一つ、主人の平田氏は敬仰していた昭和天皇の崩御を機に廃業した。現在の天場は農作業の用具の倉庫の他、収穫期の脱穀などの作業が行われている。解体には相当の経費を要するので、補修しながら使っていくとのこと。建物はほぼ原型を残している。
	寒天作り場	堂之前峠の開削前に峠から原立石を通り千原橋を渡って北へ、原盆地を抜けていった。峠の開通により松ヶ崎~原の道も多少整備されて、ボンネットバス(当寺は日ノ出バス会社)が原立石から千原橋東詰まで運行していた。当寺は橋の西側が原の中心と考えられ、原巡査
	千原橋	芥川宿の西、芥川端の東南詰にある燈籠とは形状が異なる。二科の南にある金毘羅山の金毘羅宮への道標ともいわれ、彫られている「講中」は琴平講を示していて芥川の燈籠と関連しているのではともいわれている。文化10年(1807)の作。
	金毘羅常夜燈籠	堂之前峠から原立石・千原橋・八阪神社西を経由して現原大橋北詰までが府道(枚方~亀岡)としての主要道の機能を果たしてきた。
	原の中道	現神峯山口交差点の西の、芥川に架かる比較的古い橋をいう。橋の東北詰にあった春日大明神の森に因んで付けられた。
	大森橋	

番号	名称	概要
	寒天作業場	中村垣内の和田氏所有になるもので、下条の平田氏と同時期頃の廃業閉場という。建物の東側やめに損壊があるものの内外とも当時のままに近いといわれ、機具は多少不明のものがある様であるが、高槻市としても貴重な産業文化財として、保存してはとの意見もある。寒天製造に使用した道具で名称の判明したものは名称を表示している。西北側に作業員の部屋がある。作業は寒気に行われ、大釜の火を絶やすことなく行われた。南側の田が棚場(干し場)となるので内と外の作業に近い場所にある。芥川沿いに天草の洗い場(水車小屋)があった。
	伊勢講・愛宕講常夜	近隣の人達が交代で燈明を上げている。昔はそれぞれに参拝に際しては、ここが出発地であった。
	地龍明神	原大橋手前の明神橋を50m程入ると赤い小祠が見えてくる。水の神、龍神信仰として個人で建立したといわれる。
	原大橋	昭和37年の堂之前峠開通の前後にコンクリート橋となり、砕石、出灰の石灰、材木の運送に大いに寄与し、路線バスも開設されることとなった。
	牛地蔵	日本海の幸や丹波と地元原の産物を牛の背、牛車に乗せて運んだ。京都と大阪へのルートとして険阻であるが、淀川の舟運につなげて利便が高かった。京坂越と同様に地獄谷峠も険しさは同じ、牛の苦勞を見てきた地元。旧東条垣内の人達が天保4(1833)年に牛の像を建立、小祠を建て奉納し牛を供養した。現在も2軒づつ1年交代で供養している。下の広場は、今は駐車場であるが、京坂越の牛、牛車の休憩地として積荷など改めたりするのに使われた。牛は草を食べるので、子供の怪我(吹き出物、瘡)を食べてくれると信心されている。
	原立石	神峰山寺への新しい参道案内の標石。神峯山寺を信心する大阪の商人が建立した。堂之前峠が開通する前は、峠を下り、牛地蔵の前を通って参拝した。峠を小型バスが通りだすと千原橋東詰まで運行した。今は原大橋まで拡幅整備された。
	本山寺	北摂三山寺の一つである天台宗の仏教寺院。山号は北山。本尊は毘沙門天。鞍馬寺、朝護孫子寺とともに「日本三毘沙門天」とも言われている。
	原の石垣	穴太積の石垣。
	畑中農園	どぶろくを製造している農家。週末にはそば屋としての営業もある。
	原公民館	高槻市立清水小学校分校であった建物。
21	原八景	明治26年、神峯山寺住職の近藤鶴遣僧正が「原八影之詩」という漢詩で、原地域の八箇所の景観を詠ったもの。
	21-a 大森晴嵐	一林斜日菱宣晴 人立田頭為力耕 時自半空新樹際 雨余嵐氣送清声(林の中で日が傾いてはまた晴れてくる 農夫が田んぼを耕している 木々の緑はいっそう際立って見える 雨あがりに青々とうるおう山気は清らかですっきりしている)
	21-b 宮下落雁	西声芦荻早驚秋 字乱翩々雁落洲 月下清風難去底 相呼相喚立江頭(芦や萩が出てきたことで秋が早くも来たことに驚く 飛んでいる雁の群れの列が乱れて川岸に降り立つ 月下に清らかな風が吹いて雁は低く飛んでくる 雁はお互い呼び合って川のほとりに立つ)
	21-c 横山秋月	閑吟清賞到更闌 月在天心磨玉盤 林際詠帰風露爽 一村秋色笛声残(静かに歌う声が清らかに響いて更に夜更けに至る 月は天の中心にあって寺を照らしている 林の際で風が吹いていて露も爽やかである 村はすっかり秋の色でどこからともなく笛の音色が聞こえてい)
	21-d 京坂帰牛	晨負炭薪晚入山 群牛相追澗江湾 平生得々降西坂 知有役形勞後閑(朝炭や薪を背負い晩に山に入る 群れている牛は澗江の湾あたりにつながって歩いている 牛は普段はもくもくと西坂を降りている 使役をさせられた後牛はのんびりしていることだ)
	21-e 河原夕照	垂柳垂楊緑滿塘 枝々影暗映斜陽 水禽鳴噪送烟岸 万叡一川如醉郷(柳の緑が川端に満ちている 枝々の影で沈んでいく日の光が映っている 水鳥が鳴き騒ぎけむりは川岸に流れている たくさんの山の間に流れる一本の川はまるで仙人の里にいるようだ)
	21-f 本山暮雪	高峰削玉白皚々 恰似空中ゆ素開 乍暗乍明遙似迎 寒烟一縷認天台(高い山々は玉を削ったように真っ白だ あたかも空の中からゆ素が開いているかのようである 遠くで暗くなったり明るくなったりして迎えにくるようだ 寒さに煙っているなかかすかにお寺を見ることができなくその間に古いお寺がある 常に雲に霞んでいるように見え、人を寄せ付けないように川が曲がりこんで閉ざされている 夜には細々としめやかに小雨が降り出す 雨音はひたすらに山中の石の間から流れる泉と重なって聞こえる)
	21-g 神峯夜雨	溪山無尽旧香台 常見雲烟鎖水隈 夜々蕭條微雨至 声々偏和石泉来(谷と山は尽きることがなくその間に古いお寺がある 常に雲に霞んでいるように見え、人を寄せ付けないように川が曲がりこんで閉ざされている 夜には細々としめやかに小雨が降り出す 雨音はひたすらに山中の石の間から流れる泉と重なって聞こえる)
	21-h 浄円暮鐘	春色闌于斜日中 竹林一角鎖禅宮 老僧撞出華鯨響 片々落花誰恨風(春の色は日が傾いても広がっている 竹林に閉ざされるように竹林の一角に寺がある 老僧がつく釣鐘の響きが聞こえる 切れ切れに花を散らせる風を誰が恨んだりするだろうか)
22	たけんど	地元の子どもたちが泳いで遊ぶ、八阪神社近くにある芥川の淵。

(2) ヒアリング調査概要

ヒアリング調査の概要

ヒアリング対象者		主なヒアリング項目
社寺関係者等	近藤眞道氏（神峯山寺 住職）	・地域の伝統行事 ・地域の歴史・文化資源
	中西裕樹氏、西本幸嗣氏（高槻市教育委員会文化財課、高槻市立しろあと歴史館）	・地域の歴史・文化資源
地域住民等	我妻信夫氏（地域住民）	・地域の歴史・文化資源
	畑中秀子氏（畑中農園 代表）	・地域の食文化等
	畑中仁氏（川東垣内 宮総代）	・地域の伝統行事 ・地域の食文化
	上田正氏（寒天小屋 所有者）	・地域の歴史・文化資源

社寺関係者等へのヒアリング調査

近藤眞道氏（神峯山寺 住職）

日付	2010年11月1日	2011年3月4日
概要	<p>地域の伝統行事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蛇祭りは原地区の地域住民にとって重要な行事である。 ・現在の蛇祭りは地域住民が参加する祭りだが、街の人も参加できる部分があってもいいかもしれない。 ・しかし、核になる部分は地域住民がとりしきることが重要である。 ・蛇祭りで何かの体験等を実施する形で、伝統文化を活用できると良いかもしれない。 ・例えば、蛇祭りに子供が参画する等の取組みが考えられるだろう。 	<p>地域の歴史・文化資源</p> <p>神峯山寺の境内にて、住職が同行し、以下の歴史資源がある場所を確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・九頭龍滝の不動明王 ・藍婆（にらんば）と毘藍婆（びらんば） ・笈掛石（おおいかけいし） ・お百度石



中西裕樹氏、西本幸嗣氏（高槻市教育委員会文化財課、高槻市立しろあと歴史館）

日付	2010年11月2日
概要	地域の歴史・文化資源 ・原八景という、かつての原地区の素晴らしい景色を生かすことができると良いかもしれない。 ・衣食住の生活文化を絡められると良いかと思う。例えば、蛇祭りで使用する「蛇」の素材はもち米のワラである。 ・高槻市山岳地域の特産だった寒天は、主に丹波から出稼ぎに来た方々が作っていた。 ・高槻市山岳地域の摂津峡にある数多くの岩には、ひとつひとつ名前が付いている。



地域住民等へのヒアリング調査

我妻信夫氏（地域住民）

日付	2010年11月25日
概要	地域の歴史・文化資源 ・昔、原地区には、芥川山城があった。現在は石垣等だけが残っている。 ・芥川山城は鎌倉・室町時代のものである。 我妻氏より、高槻市山岳地域に関する諸資料を借用した。



畑中秀子氏（畑中農園 代表）

日付	2011年1月6日
概要	<p>地域の食文化等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑中農園は、週末限定で蕎麦屋を開き、自分で生産したそば粉から作った蕎麦を提供している。 ・また、「高槻・とかいなか創生特区」に認定されており、どぶろくを生産している。 ・畑中農園では、吹田くわいという伝統野菜を生産している。 ・現在は農作業等の関係で週末のみ飲食店を営んでいるが、今後、自家製の野菜等を使った飲食を提供する場を自宅の敷地内に拡大する予定である。



畑中仁氏（川東垣内 宮総代）

日付	2011年1月6日
概要	<p>地域の伝統行事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蛇祭りで使用するワラ製の「蛇」は、原地区にある4つの垣内（小地区）が毎年輪番で作っているが、作り方は明文化されておらず、口伝されている。 ・4つの垣内は、それぞれ「蛇」の作り方が異なっていたり、蛇祭り当日に使用するワラ草履を自分たちで作る垣内もあれば、そうでない垣内もあるなど、各垣内で祭りには微妙な差がある。 ・畑中仁氏（ヒアリング対象者）は幼少時代にワラ草履を作って以来、作り方を忘れていたため、自分の垣内外に住む古老から、ワラ草履の作り方を教えてもらった。 <p>地域の食文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑中仁氏の家庭では、毎年もちつきをして、桜海老餅を作っている。 ・正月や法事、お盆など、人が集まるときには丁稚ようかんを作る習慣がある。



上田正氏（寒天小屋 所有者）

日付	2011年1月31日
概要	<p>地域の歴史・文化資源</p> <ul style="list-style-type: none">・上田正氏（ヒアリング対象者）の父親の世代までは寒天作りを生業としていたが、上田正氏の世代からは寒天作りに関わっていない。・上田正氏の父親は、地域で寒天作りの代表的な役割を果たしていた。・所有する寒天小屋の中には、昔ながらの寒天作りを使用する大きな釜などの道具が残っている。・しかし、寒天小屋自体の屋根が抜けているなど安全性に問題があり、寒天小屋を地域の文化的な資源として活用することは難しい。・原地区にはもうひとつ寒天小屋がある。また、原地区だけでなく、服部地区などにも寒天小屋が残っているかもしれない。・子どもたちが寒天作りの歴史について学ぶ目的であれば、寒天小屋に入らないことを条件に寒天小屋の周辺を一時的に使用しても構わない。・なお、上田正氏宅の敷地の角には、伊勢講・愛宕講常夜灯がある。



2. ノハラボたかつき検討委員会

(1) ノハラボたかつき検討委員会の構成

「高槻市山岳地域の伝統文化活用事業計画検討委員会」は、以下の委員を構成員とし、平成22年度中に3回の委員会を実施しました。

【委員名簿】

委員長 小長谷 一之 教授(大阪市立大学創造都市研究科)

副委員長 藤本 勇二 講師(武庫川女子大学文学部教育学科)

平井 一哉 氏(ライター、デザイナー 0.1not 代表)

杉本 淳 氏(NPO法人えがおつなげて 理事・事業マネージャー)

近藤 眞道 氏(神峯山寺 住職)

高瀬 幸子 氏(高槻市都市産業部 理事)

高槻市教育委員会地域教育室文化財課

随時協力 NPO法人高槻市文化財スタッフの会

(2) ノハラボたかつき検討委員会での検討概要

第1回

日 時 平成22年12月2日 10時～12時
場 所 高槻現代劇場 集会室202号

(主な意見)

持続的なプロジェクトにするため“市民のムーブメント”としての盛り上げが大切

- ・財源が限られる中、コストレスに盛り上げ、市民全体のムーブメントにするためには、ITを活用して参加型のコミュニケーションツールを用意する等により、高槻市の新・旧住民が教え合う交流ができれば良い。
- ・具体的には、皆が電子地図等に情報を書き込める市民参加型GIS等で地域の文化財について学びあう等が考えられる。

プロジェクトのニックネームやメッセージ性など、プロモーション戦略が大切

- ・プロジェクトのニックネームを市民に定着させて、概念が浸透すると、活動が盛り上がり、結果として文化財が活用されることになる。プロモーション戦略は非常に重要。
- ・自己満足ではなく、全国他地域の人が食いつくようなメッセージも必要。

伝統文化の情報は膨大かつ細かいので、情報整理には工夫が必要

- ・文化財等、人文社会の情報は膨大で細かいため、今回の調査で対象地域の文化財を時間軸・空間軸の2軸で捉え、情報整理しておくことで、その後市民が参加しやすくなる。

活動を継続するためには経済スキームを盛り込むことが必要

- ・子どものための活動は素晴らしいが、どこかで経済スキームを作っていないと、現在のノートの活動を継続させることも難しくなるかもしれない。
- ・地域にもお金を落とす仕組みを作らないと、国からの支援がなくなって困ることになる。

「ここでしかできない」プロジェクトにするため「寒天」等地域資源を活用したビジネスモデルにつなげることを検討すべき

- ・具体的にビジネスモデルを作るとすれば、対象地区が発祥の寒天が一番の地域資源。
- ・寒天から食に派生して、地域の寺で精進料理を提供し、ダイエット等売りとしてOLなどを集客するという一連の流れをビジネスモデルにできるかと思う。食育にもなる。
- ・寒天作りなどの段階から食品になる流れを一気通貫で、1年間のワンパッケージにする戦法や、寒天作りには多大な熱量が必要なため、対象地区で豊富な森林資源を、木質バイオマスとして活用する事業を実施すること等も考えられる。

次につながることを想定した調査進行を

- ・ヒアリング調査等を行うと、地域の方にアクションへの期待を抱かせることになる。今後のアクションにつながるような聞き方をすべき。例えば、今後のビジネス展開を狙いながら、伝統行事と食文化に絞って徹底的に調査する、モニタリング調査に段階性を持たせるなどの仕掛けが考えられる。

第 2 回

日 時 平成 23 年 2 月 5 日 16 時 ~ 18 時
場 所 原公民館 (旧清水小学校分校)

(主な意見)

文化財や地域に対する理解度を深めるための仕掛けを検討する余地はある

- ・時間に余裕があれば、本日のプログラムに、子どもたちが写真を地図に落とし込むような作業を組み込むと、子どもたちの各場所などに関する理解も深まるのではないかと。
- ・例えば地域の老人が色々な知識を持っていることが重要であったりする。子どもたちがそういった方々に出会うことは、教える老人、教えられる子どもの両方にとって良い。

参加者の子どもがスタッフになる流れをシステム化することが活動の広がりとなる

- ・大人が子どもたちに教えるより、子どもたちより少し上の世代である高校生、大学生が教えることで、子どもにとっての敷居は低くなっているかと思う。
- ・子ども時代に世話をしてもらった高校生、大学生が子どもの世話をする形で参加するという一連の仕組みが面白い。この仕組みを誰でも汎用できるシステムにできれば他の地域でもそのシステムを使うことができるようになるため、活動に広がりが出る。
- ・システム化する際に大事になるのはクオリティコントロールである。

ブランドづくりとコミュニティ活性化を両立するため、継続性を持った取り組みを

- ・住民の方々には、外部の人々が来ることを有り難くないという人もおり、住民の方々が、地域外の人々が活動している状態に慣れる必要がある。
- ・ノートの収益部門として検討中の“(仮称)里山カフェ”は、地元産の野菜等を地域ブランドとして販売、飲食として提供する場ができ、地域の方にどんどん参加してもらえる仕組みづくりがあれば、地域から見ても存在意義のあるものになる。
- ・ブランドづくりとコミュニティ活性化が重要な視点。両立に向けては、特にブランドづくりにおいて事業のクオリティを高めるための工夫や人材が必要になるため、中途半端にならないようにしなければならない。
- ・平成 30 年頃には、新名神道路のインタージャンクションが開通し、地域に人の動きが出てくる。このタイミングに向けて、農村の良さを生かしたコミュニティビジネスを作っていくことは、地域が結束する意味でも大切なことかと思う。ぜひ成功してほしい。

収益事業“(仮称)里山カフェ”を成功させるために

- ・今後、高槻でこのような取組を始める人々の足かせにならないよう、必ず成功してほしい。はじめから色々なことに取り組むのは無理なので、核になる事業をつくり、しっかりと事業の収支計算をした上で実験的に着手し、その後拡げていくと良い。
- ・農村部で小さなビジネスをやるときの鉄則は、最初から本格的にオープンさせず、遊び半分で実験しながら始めることである。
- ・ホームページで情報を発信していくと口コミで広がっていくのでファンを増やしていくと良い。店をオープンさせた時既にファンがついている状態を目指すべき。

第3回

日 時 平成23年3月5日 15時半～17時半
場 所 高槻センター街ビル会議室

(主な意見)

次年度以降は総合学習の一つのモデルを開発すべき

- ・今後の取り組み方向としては、総合学習の一つのモデルを開発すべき。また、検討だけで終わらせないため、教育委員会を巻き込むための仕掛けや定量的な見せ方が必要。定量的な見せ方としてはプログラムの活発度（児童の発言量等）を指標とするとよい。
- ・ノートの実績は、子どもを対象に活動してきたということである。一方で、学校現場では総合学習がうまく出来ずに困っている。よって、ノハラボたかつきが総合学習のモデルを開発し、学校の総合学習の空白を埋めるだけでも大成功になると思う。

総合学習モデルの開発過程が、生涯学習プログラムへと広がる道筋になり得る

- ・本年度の調査をベースに開発したプログラムを質的に向上させていくためには、地域の多様な人材、地域の資源が豊かに絡み合うことが必要である。また、これによりプログラムの量も増えていく。このプログラムを開発する過程そのものが、生涯学習に広げていく道筋になるとすれば、面白いと思う。
- ・子どもに対するプログラムも、子どもが自分以外の誰かに教えて広がることが目的・着地点であり、まちのみんなが先生になるということが最終目的になればよい。そのためのサロンが前回委員会で事務局が提案された収益事業“里山カフェ”であるということになれば全てがリンクする。

関係機関がかかわりやすくなるような地域ポータルサイトの運営が必要

- ・この委員会がノハラボたかつきのウェブサイト地域ポータルサイトとして運営し、関係機関の“入会地”を作ることにより、行政の関わりやすい形を作る。
- ・ノハラボたかつきで今後検討する総合学習モデルの発想は、「シブヤ大学」と近いので、せっかくポータルサイトを立ち上げるのであれば、「大学」という名前を入れておけば、情報をつなげられるかもしれない。

総合学習モデルをビジネス展開することは可能

- ・総合学習モデルをビジネス展開することは可能。例えば、教育委員会と包括協定を組んで課金の仕組みを作る事例もある。モデルの効果と安心・安全性の見せ方等、営業ツールとしてどう見せるかが重要である。
- ・まちのみんなが先生であるという状態がゴールであり、それを了解せざるを得ないようなプログラムができれば、学校現場の先生方も学校外に出て行く意識が芽生える。
- ・子どもから何かを引き出すことが学習になっていくが、地域の方が引き出した方がよりリアリティがある。ただ、地域の方は話すことが専門ではないため、地域の方との中間に入って話を引き出す人がいれば、もっと魅力を引き出せる。ノートが総合学習としてプログラムを展開する中で、人材を強化すれば、質を上げることが出来るかと思う。

(3) 委員会各回の記録

第1回検討委員会

日時

12月2日(木) 午前10時00分～正午

場所

高槻現代劇場 集会室202号

議事

1. 開会
2. 本委員会について
 - (1) NPO 法人ノートの紹介
 - (2) 地域伝統文化総合活性化事業、本委員会の趣旨説明
 - (3) 委員自己紹介
 - (4) 会長・副会長の互選
3. 高槻市山岳地域に関する事前調査の報告
4. 協議
 - (1) 高槻市山岳地域の伝統文化実態調査について
 - (2) 「(仮称)わくわくプレスクール」の実施によるモニタリング調査について
 - (3) 来年度以降のスケジュールについて
5. 閉会



委員会の様子



アドバイザーによる現地調査の様子

記録

1. 開会（事務局）

2. 本委員会について

（1）NPO法人ノートの紹介（杉本（真））

（2）地域伝統文化総合活性化事業、本委員会の趣旨説明（事務局：資料1、2）

（3）委員自己紹介

小長谷： GISなど地域情報に詳しいが、歴史家ではない。まちづくりが専門で、自分でNPOの活動に取り組んでいることもあり、ぜひ手伝いをさせていただきたいと思っている。

高槻市の山岳地域には面白い文化が眠っているとのことだが、住宅地の住民はこういったことがすごく好きである。

住宅地の住民が、新住民ではなく、高槻市民として、誇りのある高槻を作っていけるよう、皆さんを有効に活用できるような委員会として進めていくことをお手伝いしたい。

杉本： 私が理事を務めるNPO法人えがおつなげては、山梨を拠点として、ノートと似た活動にも取り組んでいるが、このような活動だけでは生活していくことが出来ないかと思う。

えがおつなげては多くの補助金を獲得してはいるが、ビジネスモデルを確立して4億円規模のお金を動かしており、現在2~30人の常勤スタッフが働いている。

地域活性化のための活動は、ビジネスモデルを確立することで自分たちの食い扶持を稼がないと、継続性を持たせることができないかと思う。

また、えがおつなげては、都市農村交流のマネジメントをコーディネートできる人材育成のため、関東ツーリズム大学などの取組を行っており、国内でネットワークの拡大を図っている。

さらに、えがおつなげての代表が、先日韓国で、10年以内にアジアツーリズム大学を作るという話をしてきたところである。

今後、ノートとえがおつなげての連携を組むことができたらありがたい。

平井： 冊子の編集やコピーライト、写真撮影、デザインなどを手がけている。

私は高槻在住だが、住み始めたのは1年半前からである。それまでは四国でタウン情報誌を作る会社に勤めていたため、本事業で私が役に立てるとすれば、地域を掘り下げながらの情報発信かと思っている。

なお、高槻に来てからは奈良県立図書情報館からの仕事で「読み歩き奈良の本」をまるごと一冊担当し、奈良の歴史を絡めた文学や映画などの切り口から情報を収集・発信した。このような情報収集・発信を本事業に生かせたらと思う。

（4）委員長・副委員長の互選

事務局より、委員長として小長谷一之氏、副委員長として藤本勇二氏（欠席）を推挙し、承認される。

3. 高槻市山岳地域に関する事前調査の報告（事務局：資料3）

4. 協議

（1）～（3）

小長谷： 財源に限られるなかで、できるだけ市民を巻き込んで盛り上げていくことが求められると思うため、私からはプロモーションについて意見を申し上げます。

まず、このプロジェクトを流行らせるため、高槻市山岳地域という堅苦しい名称でなく、本エリアまたは本プロジェクトのニックネームを決めると良いかと思う。

例えば「高槻やま文化地区」や「やま高槻プロジェクト」などが考えられる。名称が市民に定着して概念が浸透すると、文化財として盛り上がるかと思う。

また、コストレスに盛り上げ、市民全体のムーブメントにするため、高槻市の新・旧住民が教え合う交流ができれば良いと思う。

その手段として、ITを活用してほしい。例えば、一方的に情報を発信するだけでなく、皆が電子地図等に情報を書き込める市民参加型GISにできると良い。

対象地区に行く前の予習、行った後の記録などが書き込めると良い。

藤沢市では、「電縁マップ」にバリアフリーについて住民が書き込み合い、コストレスで盛り上がっている。

ただ、膨大で細かい人文社会の情報を、時間（スケジュール）・空間（書き込みマップ）的にどのように情報整理するかが課題となるかと思う。

例えば、時間軸として、蛇祭りなど対象地区のイベントカレンダーをまとめれば、市民が参加しやすくなる。

空間的には、原いっぱいマップを電子マップにして、市民らの書き込みによりサステナブルに発展させていけると良い。

プロジェクトが終わっても上記の取組を続けるため、今年度にプレHP等を作成するとなると、ドメイン名に関わるニックネームを早めに決めた方が良い。

平井： 短・中期的なビジョンや落としどころを明確にしなければ、ヒアリング調査を実施するにしても、具体的に何を聞けば良いのか決められないかと思う。

パンフレット作成にしても、パンフレットの形状も含めて早めに決めたいうえで、落としどころありきでヒアリング調査を実施して、漫然と話を聞くということにならないようにした方が良いかと思う。

杉本： 対象地区が発祥の寒天作りを現在も出来る人はいるか。

事務局： 対象地区では、株式会社タニチが寒天を生産している。なお、タニチ、原地区の畑中農園を含む市内8社による、食品を中心とする「ものづくり研究会」がある。

杉本： 昔の寒天作りをするための道具や機械は残っているか。また、それらの道具を使える人はいるだろうか。

事務局： 道具等は蔵にはあると聞いたことはあるが、使える人がいるかはわからない。

杉本： 対象地区の地域資源を活用して具体的にビジネスモデルを作るとすれば、対象地区が発祥の寒天が一番の地域資源かと思う。

寒天から食に派生して、坐禅を行っている（神峯寺などの）寺で、寒天の精進料理を箱膳で

提供し、ダイエット等売りとして OL などを集客するという一連のスキームをビジネスモデルにできるかと思う。食育にもなる。

一流のおもてなしをすれば大阪市内などからも客は来ると思う。

子どものための活動は素晴らしいが、どこかで経済スキームを作っていないと、現在のノートの活動を継続させることも難しくなるかもしれないと思う。

また、自己満足ではなく、北海道から沖縄まで他地域の人が食いつくようなメッセージが必要と思う。小長谷氏の言われたニックネームを作るにしても、全てカタカナで「ヤマタカツキ」にするなど、何やこれかと思うものにする方が良いと思う。

事務局： 実は、市主導の「寒天プロジェクト」という取組がある。

杉 本： どのような切り口で取り組んでいるのか。

事務局： 食という切り口である。

杉 本： 「この地域の強さは寒天」という地域との連合性、「この地域でしかできない」という見せ方が重要である。

小長谷： 私も賛成である。高槻市は健康都市宣言をしている。

二料山荘など、世間と隔絶した場所で、メタボリックな人々等を対象として断食道場を実施してはどうか。高槻市はサンスターや JT のある食品工業都市でもある。

本事業で取り組むかどうかはわからないが、市民型の健康ビジネスにつながるのではないかと、本事業の地域資源調査等がきっかけとなれば良いかと思う。

なお、本事業の HP、ML 等での情報発信は、子どもやその親（メタボリック世代を含む）を、今後の断食道場等に巻き込むためのネットワーク作りになると思う。

杉 本： 昔の修行では、最後に食に関する修行を行うため、食を司る人は偉い立場にあった。よって、寺で食に関するプロジェクトを行うことは崇高な位置づけになる。

これに高槻が寒天の発祥の地であることを掛け算すれば、ここでしかできない、他の地域が真似できないプロジェクトになるかと思う。

また、寒天作りには多大な熱量が必要なため、対象地区で豊富な森林資源を、木質バイオマスとして活用する事業を実施することも出来る。

事務局： 樫田地区では、民間事業者が木質バイオマスに関するプロジェクトを計画しているようである。

杉 本： 寒天作りのための木質バイオマス活用というように連動させれば、雇用も発生し、産業になる。

また、寒天作りは深夜から早朝に掛けての作業があり、労働としてはすごく大変なものであるため、子どもや OL などと一緒に取り組むとか、断食道場としてやることも考えられる。

小長谷： 高野山では、精進料理がすごい人気で高く売れている。高槻の商店街では食や農、食育のイベントに取り組んでいる。健康都市高槻で農業に取り組み、歴史都市として歴史の勉強もしながら、子どもと精進料理を作って食べることも考えられる。

杉 本： えがおつなげてでは、参加者に最後にワークショップをしていただき、地域資源のまとめと何をやりたいかの意見出しをしていただいてから、それをビジネスモデル化している。

えがおつなげての主力商品は、活動拠点の限界集落にある耕作放棄地での開墾道場である。全てセッティングしてあげた農業体験はウケず、愛着が湧かない。

開墾の後にもワークショップを行うが、開墾した参加者たちの意見を聞くと、農地に愛着が湧いており、オーナー制度につながっている。

以上は農業の取組だが、これを食関係の取組に生かすとすると、寒天作りなどの段階から食品になる流れを一气通貫で、1年間のワンパッケージにする戦法が考えられる。

このような取組で地域にもお金を落とす仕組みを作らないと、事業が終わって補助金がなくなって困ることになる。

ちなみに、高槻にも箱膳はないか。

事務局：高槻にはないかと思う。寝屋川にはあると聞いたことがある。

杉本：補助金があるから食い扶持確保のために本事業をやってみるというのではなく、ノートとして本来目指す方向でコンセプトを一本通さないといけないかと思う。

小長谷：1月3日は、本山寺で子どもたちがヒアリング調査することになるのか。

事務局：本山寺での火渡り行事への参加は今年も行っている。ヒアリングを行うとすれば、子どもたちの動機付けは必要と考えている。

小長谷：原八景を一日で見て歩いて回るのは大変だろうか。一日で回るとすればいくつかを選んで回ることになるだろうか。

事務局：たしかに原八景を一日で全部は回れないかと思う。ただ、原八景に選ばれている場所は、一部を除いて子どもたちが日頃活動しているエリア内である。

ちなみに、原八景のうち、牛地蔵は寒天の材料を運んでいたと言うことで、寒天と関連がある。

なお、寒天小屋の近くではさつまいも畑の収穫をさせてもらったことがある。

小長谷：原八景は大森橋等の周辺に集中しているため、この辺りにポイントを絞ることも考えられる。ちなみに、酒蔵跡でどぶろくを造ることはできないだろうかと思う。

事務局：実際に寒天作りをされていた方々は、丹波から山越えて出稼ぎにいられていたようである。芥川の右岸などには、煙突のような設備のある家屋が残るなど、寒天作りの名残のある家はある。

小長谷：寒天小屋の見学はできないだろうか。

事務局：小屋の屋根に穴が空いている。また、所有者の許可を得ることは難しいようである。現在は小屋のなかに農機具が入っている。

原地区に住んでいる寒天小屋は2つあるので、マップ上に追記してほしい。下條垣内の平田家と、中村垣内の和田家がある。和田家には寒天作りの道具もあるかと思う。

小長谷：寒天作りの資料(参考資料)を携えて和田家を見学し、原八景の大森橋なども一緒に回るといっても考えられる。

事務局：地元には伝統的な寒天作りの道具が残っているのではないかと思う。

杉本：今年度は、モニタリングとヒアリングを通して、詰まるどころ何をしたいのだろうか。

事務局：地域の方々が何を大事に思っているのか聞いてみないと分からないため、考えを把握するという面があり、また、地元の方々と触れ合ったり体験をするためのものという面もある。

杉本：経験上、ヒアリングは地域の方にアクションの期待を抱かせることになる。来年度のアクションにつながるような聞き方にしないと意味がない。

例えば、来年度のいつまでに精進料理をみんなで作るイベントを開催すると決めた上で、イベントの中味を決めるため、どんな料理を出せるか、何人分提供できそうかをヒアリングする

など、具体的に、ステップアップのための事業にした方が良い。単に何を食べてますか、というヒアリングをするだけではもったいない。

モニタリングを2回やるのであれば、来年度のアクションにつなげるため、ステップ1、2のように段階性を持たせるなどの仕掛けは考えられないだろうか。

小長谷：今年度は残り4ヶ月程度と限られているが、今年度の事業では、今後のビジネスに結びつくようなヒアリングをすることになるだろうか。

例えば、対象地区を健康フィールド空間、ヘルシー空間にするため、伝統行事と食文化に絞って徹底的に調査してみるということが考えられる。

事務局：本事業が終了した後も、現在議論しているようなテーマを軸としたノートの活動が継続しているかどうか重要となる。地域活性化だけでなく、学校との連携など教育効果も図りたい。

平井：ネーミング、ウェブのことについては、先を見据えた上で土台を早めにつくる必要があるかと思う。

第 2 回検討委員会

日時

2月5日(木)16時00分～

場所

原公民館

議事

1. 開会

2. 調査等の報告

(1) 1 / 3の火渡り行事について

(2) 本日開催したプログラムについて

(3) その他

3. 協議

(1) 山岳地域の伝統文化活用について

(2) 3 / 5のヒアリング・モニタリング調査について

(3) 地区・プロジェクト名称について

4. 閉会



委員会の様子

記録

(1) 山岳地域の伝統文化活用について

小長谷： 子どもは成長して子ども向けの活動を卒業していくので、新たな世代の子どもたちを対象を拡げていくため、小学校と連携して、学校の夏休みなどの予備プログラムとしてディープなプログラムでなくても一度は体験入学することにできないかと思った。

高瀬： 「最近の子は…」と言うが、子どもたちが写した写真を見て、高槻市都市部の子どもたちが原の里山の景色などに感動していることが分かった。良い思い出になると思う。

現在参加している子どもたちは、親御さんのご理解があるのだと思う。自発的に参加しているからこそ楽しめる面もあるかと思うため、学校行事に組み込むとなると義務的になるかもしれない。

小規模だからこそ子どもたちが生き生き出来る面もあるかと思う。参加する子どもに地域のリーダー的意識が芽生えると良い。

ノートの活動は学校等と連携しているか。

事務局： 市内の小学校を通して参加者を募集している。また、夏の活動は英語 DE キャンプで学校と連携しているが、冬の活動は連携していない。

高瀬： 子どもたちが成長して高槻市を離れても、帰ってきたときに集えるよう、同窓会的のような仕組みも将来的には必要かもしれない。

小長谷： 単に英語 DE キャンプをするだけでなく、時間・空間の枠を作れば、活動や市民の認知が広がるのではないか。

具体的に言うと、時間としては、火渡りなど、(仮称)ヤマタカツキの年間行事やお祭りのスケジュールを公開し、何かきっかけがあれば小セミナーなどを開催しても良い。

また、空間としては、GISの専門家を入れるなどして、みんながHP上に自分で何か情報を入力できる、HP上の地図をクリックすると写真が出てくる、あるいは写真をアップできるなどの仕組みができると良い。

ウィキペディアではないが、地域の方々も四季を通したコンテンツを追加して遊ぶことができるようなものもあると良いかと思う。

西本： 時間に余裕があれば、本日のプログラムに、子どもたちが写真を地図に落とし込むような作業を組み込むと、子どもたちの各場所などに関する理解も深まるのではないかと思う。

小長谷： 例えば地域の老人が色々な知識を持っていることが重要であったりする。子どもたちがそういった方々に出会うことは、教える老人、教えられる子どもの両方にとって良いかと思う。

杉本： 子ども時代に世話をしてもらった高校生、大学生が子どもの世話をする形で参加するという一連の仕組みが面白いと思った。

しかし、その仕組みがシステム、ロジックになっていないと思う。現在は、ネットワークが強固ということではあるが、活動への想いを原則に組織が成り立っているため、これがシステムになれば面白く、他にも広がっていくのではないかと思う。

小長谷： 大人が子どもたちに教えるより、子どもたちより少し上の世代である高校生、大学生が教えることで、子どもにとっての敷居は低くなっているかと思う。

杉本： システムとは誰でも汎用できる出入りできるような環境をつくることである。例えば、現在のノート代表の杉本氏のような誰かがいなくても機能するのが美しいシステムかと思う。そうすれば、他の地域でもそのシステムを使うことができる。

小長谷： 同じようなプログラムの仕組みができていれば、直接杉本氏がでてこなくても、卒業生の先輩リーダーが企画立案して、行事をシステムに基づいて実施できる。こうなると、だんだん広がっていくというか、ムーブメントになる。

杉 本： そこで大事になるのはクオリティコントロールであるが、これが難しい。

小長谷： 私の大学の社会人大学院に、枚方のコミュニティ FM について研究している者がいる。全国のコミュニティ FM が赤字で破綻しているが、FM ひらかたはやり方を切り替えて成功している例のひとつである。

地域の子どもが出演できるようにしたとのことだが、そこで大事なのがクオリティコントロールのようである。この FM は専門家が子どもたちに指導して質を確保し、地域のムーブメントにしている。

なお、教育を利用したムーブメントは、まちづくりでは広げやすい。子どもには親や祖父母などもついてくるため、マーケットを拡大しやすいかもしれない。

(仮称) 里山カフェについてはいかがか。

事務局： 活動の質の確保や、活動の持続を考えたとき、やはり無償ボランティアで続けにくい面がでてくると考えている。また、地域活性化がテーマのひとつということもあり、地域に少しでもお金が落ちる仕組みをつくっていきたいと考えている。

小長谷： (仮称) ヤマタカツキがサステナブルな取組を続けていくとなると、取組を分かりやすくカテゴリライズして、見やすくすることが非常に重要であると思う。

大きく言うと、 歴史を学ぶ、 食・農を学ぶ、 と関連のある 2 つのカテゴリーでポータルをつくり、ノートやしるあと歴史館、(仮称) 里山カフェなどが連携して同じテーマでプロジェクトを実施していくことが重要かと思う。(仮称) 里山カフェは食の拠点になるかと思う。

外部から見ると、今一番普遍的なキーワードは「健康」かと思う。3年前、大阪府知事室よりシニアフェアの企画について依頼を受け、それまで知られていなかったナニワ野菜をテーマにしてほしいとお願いし、それはブームになったが、今一番都市住民が不安に思っているのは「食」である。オーガニックの農作物を手作りで提供し、さらに食・農の学習の場でもあるとして(仮称) 里山カフェをアピールすることは良いと思う。食育になる。

ところで、高槻市では食・農のウィーク、農のウィークの両方があるのはどういうことだろうか。

高 瀬： 食育フェアと近隣でのイベント(高槻市農林業祭)は、担当課が異なるが、同日に調整して実施していることから分かる通り、庁内の部局は関連するテーマで少しずつ連携を始めている。なお、食育フェアには企業も絡んでいる。また、場所的な問題もあるが、もっと連携しようという動きもある。

小長谷： 週末のみ営業のそば屋を拠点にして、店舗をカフェとして常態化することは良いと思う。現在営業しているのが週末だけというのは、人手の問題があるのか。

事務局： ある。現在のそば屋は、地域の方がボランティアとしてお手伝いすることによって運営が成り立っている。(仮称) 里山カフェの事業には、この仕組みをどうにかしたいという意図もある。

小長谷： そば屋に駐車場はあるのか。

事務局： 地元の農家が整備する予定である。

高 瀬： 地域の立場から言うと、住民の方々が、外部の人々が本地区へ来ることを望んでいるかどうか

かということをはっきりしておらず、どこまで観光を進めるかということを探れていないかと思う。なかにはよそ者が来ることを有り難くないという人もいるかと思う。

そば屋は地域が一丸となっている良い取組だが、人手の問題があるなど、地域全体に波及しているとは言いにくいかと思うため、住民の方々が、地域外の人々が活動している状態に慣れる必要があるのではないかと思う。

事務局： わくわく探検隊についても、何かやっているなぐらいの印象で地域の一部の方々には認識されているかと思うが、活動内容や活動意図まで認識していただけていないかと思う。

住民の方々が生活に困っていない状況で、外部の人が来てどうなるのかということイメージしていただき、活動に巻き込んでいくためには、具体的な形がなければ難しいかもしれない。

小長谷： 住民に専業農家はいるのか。

高瀬： 原地区に専業農家はいないかと思う。自家用の農作物の余りを朝市等に出している状況かと思う。

事務局： そば屋に通っているボランティアの方々は、自分たちが栽培した農作物を食べてもらいたいものの、食べてもらう仕組みがないと考えている。

(仮称)里山カフェが、そういう農作物提供等の場になると、地域としても受け入れやすいのではないかと考えている。幸いにも、ボランティアの方々が集うベースとして、そば屋という場があり、今はみなさんお金をあまりもらっていないが、そこそこ小遣い稼ぎができる仕組みになると良いと考えている。

小長谷： 原に有名な野菜などはあるか。

事務局： 吹田くわいを作っているほか、黒枝豆の栽培には取り組んでいる。

小長谷： カキで有名な岡山県の日生では、五味の市で、都会には持っていけない規格外の魚の産地市場を早い時期から行っており、日生は倉敷に次いで、岡山県の行きたい街2位になっている。産地市場を作ることは、魚価が安定し、ブランド化できることによる。

原産の野菜、そばなどを原ブランドとして朝市で販売するとともに、(仮称)里山カフェを開業し、それらの野菜等を食べられる場ができれば、地域から見ても存在意義となるのではないかと思う。

高瀬： 原地区に限らず、北部の檜田地区にも色々な取組があるため、両地区が連携して、地域の野菜を使った料理を提供するという事も考えられるかと思う。

両地区は一つの地域としてどぶろく特区になっているが、実態としてはひとつになることが難しいため、いいきっかけになれば良いと思う。

小長谷： 両地区が連携して(仮称)ヤマタカツキブランドになると良い。

参考資料の「援農コーディネート等部門」には、地域の方が参加するのか。

事務局： 地元の農家では、ボランティアの一部の方に金銭のお礼をすることがあるという状況だが、農家さんはこの状況をどうにかしたいと考えておられる。

小長谷： 本地区の近くに健康的なお茶などはないだろうか。

事務局： 高槻にはお茶はないかと思う。

小長谷： 日本茶の喫茶がないため、寒天で作ったローカロリーな和菓子を提供できる場があれば良いと考えた。

また、参考資料にある日替わりランチとはどういうことか。

事務局： 現在は、ボランティアの方々が各々料理を作って持ってきている状態なので、これらの方々

が、日替わりシェフとして作るという形にできないかと考えている。

小長谷： この辺りで、豚をオーガニックで育てているところなどはないか。

事務局： 森林センターでは、豚は育てていないが、燻製を作っているようである。

小長谷： 森林センターで食事はどのように提供されているか。また、食材はどこから調達されているだろうか。

高瀬： 自前で調理している。食材は地域で作られたものも使っているが、色々なところの食材を使用しているかと思う。

小長谷： 客が来るかどうかはブランド化できるかによるため、食材の素性を明らかにし、徹底的にこだわるべきと思う。どこでも食べられるものでは客が来ない。

杉本： まずは事業の収支計算をした方がいい。はじめからいろんなことに取り組むのは無理であるため、何を収益部門にするか検討して核になる事業をつくり、その後広げていくと良い。

今後、高槻でこのような取組を始める人々の足かせにならないよう、必ず成功してほしい。そのためにも、必ず成功する仕組をまずはひとつだけ作ってほしい。

小長谷： 現在は週末だけ営業しているそば屋を常態化するという拡張の形でも良い。

杉本： 収益事業の候補としては、何が考えられるだろうか。

事務局： ランチとカフェ・喫茶になるかと思う。

杉本： 土日だけでなく、平日も営業するのか。

事務局： 土日・平日を併せてということになる。

高瀬： 地域の方も来ないことはないだろうが、市場はどこになるだろうか。

事務局： 原地区から高槻市中心市街地へ向かう方向には住宅地が広がっているため、その辺りの住民の方々なども想定している。

小長谷： 私が応援して大阪市北区で作った「創造都市北サイト」というホームページは、全く予算を使っていないが、日経グローバルで取り上げられ、大学での取組で全国4位になった。予算がなくても成功している例である。

お金・マンパワーがないとしても、ウェブサイトを巧く使えるかどうか成功のカギになる。何千万円もかけて新聞・テレビ広告をするよりも、ホームページを作って趣味の方々が高齢になるとともに、市にリンクを繋いでいただくなどした方が効果的である。

また、例えば高槻にはゆるキャラが31あるとのことだが、こういったものも街に来る人のためにまとめていけないといけない。人間が一度に認識できる内容は3つである。そこで、市から、歴史都市高槻ブランド、健康都市高槻ブランド、アート都市高槻ブランドなどとして認定してもらい、健康都市高槻の中心は里山カフェであることを発信すると良い。

さらに、歴史都市、食・農の中心である(仮称)ヤマタカツキのホームページを、市のホームページとリンクを繋いでもらおうと、高槻以外からも人が来てくれることになる。新聞などよりもウェブやメールマガジン、ツイッターの方がコストゼロで効果的である。

なお、地物の野菜が食べられる、寒天体験ができることなどは重要な要素である。また、オーガニックというのは他にもあるため、寒天がローカロリーであることや、そばが主食のなかでは最もローカロリーであることなどを生かして、「ローカロリー+オーガニック」とすれば特徴づけられるかと思う。

京都府方面からも人に来てほしいだろうし、お金かけないと成立しない方法ではなく、以上のような方法でコストレスに情報を発信した方が良い。

杉 本： 実際に店舗を始めるのはいつからの予定か。

事務局： 準備ができ次第だが、今年の12月頃からと考えている。

杉 本： 農村部で小さなビジネスをやるときの鉄則は、最初からオープンせず、遊び半分で実験しながら始めることである。

畑中さんは、家の前の掘建て小屋で農作物の無人直売をやっているが、あれで正解である。あんな所にはじめから人を置かず、売れてきたら人を置くということで良い。それがマーケティングである。

掘っ立て小屋でも土日だけでも良いのでとりあえずカフェを始めて、どれだけ人が来るか見てみると良い。そして小長谷先生が言われたようにホームページで情報を発信していくと口コミで広がっていく。

しっかりと店舗を構えてのオープンを検討中ということでファンを増やしていくと良い。そしてある時点で店をオープンさせれば、その時既にファンがついていることになる。

お客をつかまえる論法、商圈の見方などもあるが、それについてはとりあえずお店を始めた後で教える。また、どこで実験をやるかがポイントになるかもしれない。はじめは移動販売でも良い。

小長谷： その成功の鉄則は、まちなかにも当てはまる。大阪市北区の中崎町では、雑貨屋等が若者に人気となっているが、その出店戦略は、全店ウェブ店からはじめ、顧客の関心が出てからリアル店舗を出す形である。リアル店舗を出す時点で最初からファンがいるため、失敗がない。

畑中農園のところを拡大する形で、ウェブも使いながら、遊びながら始めて、様子を見ながら広げていくと良い。

杉 本： 経営をするのであれば数字オタクになってほしい。例えば、交通量が平日・土日にどれだけあるか、立ち寄り率はどれだけか、商圈は何キロに設定し、その商圈に人口がどれだけ住んでいるかなど、数字オタクにならないとビジネスに強くなれない。

また、数字に強くなることで、一日にどれくらいのお客が来るかということや、自分の人件費等々から逆算して、単価をどう設定すればよいか、利益率がどれだけになるかということなどが見えてくる。

高 瀬： 市の施策だが、企業振興課が商工会議所とともに実施している「たかつき起業家道場」というものがある。

数字に詳しくなるため、何度か専門家からアドバイスを受けるものだが、毎年生徒を募集しており、実際に起業している方もいる。その後もアドバイスを受けられる仕組みである。ぜひ入学してほしい。多分無料かと思うが、確認する。なお、マイファーム（西辻氏）は一期生である。

話は変わるが、ブランドづくりとコミュニティ活性化のどちらを重視するかということが重要な視点かと思う。説明を聞いていると、どちらかと言うとコミュニティ活性化が先に来るかと思っているが、同時に市内外に情報を発信して観光客を呼び込むとなると、クオリティやブランドを高めるための工夫や人材が必要になるため、中途半端にならないようにしなければならないかと思う。

事務局： 迷うところだが、地域の人が必要にしているかどうか分からない状況で、良い（と思う）ものを作るというだけでは地域との摩擦になる懸念もあるため、地域の方が参加するメリットを優先した方がいいかもしれない。

小長谷：そこは永遠の課題だが、はじめから爆発的に人が来ることはないだろうし、サステナビリティが課題を解決するのではないかと思う。

地域がブランド化すれば商品価格や資産価値が安定するし、地域にとっても悪い話ではないかと思う。また、シャドーワーク(ボランティア)のようなことをお願いしていた地域の方が、インストラクターになるなどして活躍する場をつくることも大事なことかと思う。

高齢者が多い地域で地域おこしに成功している例では、高齢者を福祉の対象など弱い者として保護して扱うのではなく、高齢者自体が若者に色々なことを教える、地域のマップを作るなどしており、高齢者の介護度が下がるところも多い。

地域の方にどんどん参加してもらえる仕組みづくりがあれば、地域のブランド化とコミュニティの活性化は矛盾する話ではないかと思う。

高瀬：先の話になるが、平成28～30年度には、本地域と成合辺りに新名神道路のインタージャンクションが開通し、原地区にも側道が下りてくる予定であり、開通すれば地域に人の動きが出てくる。

この道路が開通する頃、地域がどのように活性化しているか考える上で、農村の良さを生かしたコミュニティビジネスを作っていくということは、地域が結束するという意味でも大切なことかと思う。ぜひ成功してほしい。

小長谷：現在、道の駅はコンビニの売り上げを超えているが、人気の理由は食への不安からくるものである。都市住民にとって地元ブランドのものを食べられることほどありがたいことはない。これからは安全を考えた食が主流になるかと思う。

話は変わるが、高槻に北摂三山寺があるということは、北摂の歴史的なものは高槻に集中しているという理解でよいのか。

事務局：北摂の各市町に主張はあるかと思う。

高瀬：意外に知られていないが、「青い山脈」という歌は、高槻から見た北摂連山を歌ったものである。

小長谷：本山寺には日本三大毘沙門天、神峯山寺には日本最初の毘沙門天があるとのことだが、毘沙門天は北方の守護神であるから、この辺りは大阪平野の北の守りということかと思う。よって、新名神道路ができれば、毘沙門天などの歴史面でも観光を掘り起こすことができる。

歴史は博物館的に保存することも大事だが、みんな(特に地域の人々、なかでも若者)に知ってもらうことによって生きた歴史になり、それにより保存が続くということになる。

新名神道路完成の時期に向けた長期計画として、里山カフェなどを通じて(仮称)ヤマタカツキをブランド化していくが大事かと思う。

事務局：本日実施したプログラムのような活動を続けていく場合、原地区を中心としている現在の活動エリアを拡げることについて、高瀬理事のご意見があればお聞きしたい。例えば、近隣の森林観光観光センターなどと連携をすることなども考えられるだろうか。

高瀬：森林観光センターの運営者にプログラムを行うことを相談するとすれば、施設として阻むことはないかと思う。

施設は人に来てほしいし、花菖蒲園跡が4月に市民農園としてオープンする予定となっており、お子さんが来ることを歓迎するかと思う。

小長谷：エリアを拡大することは良いと思う。なお、原地区だけでなく、森林観光センターなどの施設や摂津峡も(仮称)ヤマタカツキのエリアに入っている。子どもから大人までリピートして

来ることを考えると色々な所がある方が良いと思う。

また、市民農園で野菜等を作った人が里山カフェに出荷すること、そして出荷する人が里山カフェに来ることなども考えられる。

高瀬： 市民農園を借りる方々が、里山カフェで一服するというストーリーはあるかと思う。

小長谷： (仮称)ヤマタカツキファンクラブを作って、訪問者にメルマガを送るとともに、ウェブに記録を書き込んでもらうことを通して愛好者を増やしていくと良いと思う。

さきほどなにわ伝統野菜の話をしたが、そこで応援してくれた NPO 法人シニア自然大学校は、会員 1 万人規模、予算 10 億円規模で、国内でも最大級の NPO かと思う。

この NPO はコンセプトがうまい。マーケットの話をするが、我々の親の世代など、日本人はみんな歳を取るとガーデニングをしたくなる。そこに膨大なマーケットがあるのである。

この NPO では高齢者が若い人に自然について教えたり、ガーデニングをさせてあげたりするが、シニアと自然を結びつけるというコンセプトが良いため、独りでの会員数が増えた。

そこで、高槻のもうひとつのマーケットはシニアが考えられるかと思う。やはりオーガニック、ローカロリーの切り口でやると良いかと思う。

二料山荘で地元企業と連携した健康道場を行うことも考えられる。

事務局： シニアの探検隊をやってはどうかという意見を以前から各方面より受けている。

高瀬： 世代間交流ができる場にするのは大事かと思う。

(2) 3 / 5 のヒアリング・モニタリング調査について

事務局： 3 / 5 に予定されていた坐禅体験が中止になった。

本日はせっかく子どもたちがしろあと歴史館で寒天について学んだため、3 / 5 のプログラムとしては、寒天を使ってところてんを作るなど、寒天を活用したプログラムを検討する。

なお、食育プログラムに詳しい藤本委員と相談しながら検討する。

調理できる開催場所・時間等についても検討した上で、決定次第お知らせする。

杉本(淳)： 可能であれば本日のような夕方からの委員会開催でなく、関東から日帰りできるような時間設定が好ましい。

事務局： 子ども用プログラムとの別日開催も検討する。

(3) 地区・プロジェクト名称について

杉本(真)： プロジェクト名称候補の 1 つ目は、「たかつきのーす」で、「のーす」が「北」や「の巣」を意味する。

2 つ目は「たかつきのおと」で、「のおと」が「NPO 法人ノート」、「の音」などの意味になる。

3 つ目は「たかつきさん」で、「さん」が、照らすという意味の「sun」や、「山」などの意味になる。

杉本(淳)： ノート内部で決めるべきである。決定したらお知らせしてほしい。

小長谷： 3 つの候補のなかで言えば「たかつきのーす」が良いかと思う。「ヤマタカツキ」も含めて検討してほしい。

(4) その他

小長谷： 高槻市は、JAZZ ストリートの取組など市民力があると思っているが、ノートの活動も、本日のプログラムをはじめとしてこれまでの蓄積があるかと思う。これらの情報を時間・空間軸で、ウェブサイトを通じて発信してほしい。発信することで中央の役所等へも情報が届き、補助金等も獲得しやすくなる。

GIS の専門家もよろしければ紹介できる。メーリングリスト等についても無料でお手伝いできるため、活用してほしい。

第3回検討委員会

日時

3月5日(土) 15時30分～

場所

高槻センター街ビル会議室

議事

1. 開会

2. 調査等の報告

(1) 2月5日のプログラム成果報告(事務局:資料1)

(2) 3月5日のプログラム開催概要(事務局:資料2)

(3) その他(事務局:資料3、4)

4. 協議

(1) 山岳地域の伝統文化活用に関する本年度の取りまとめについて

(2) 次年度以降の本事業の取り組み方向について

記録

小長谷： 報告書の構成としては、事務局が独自に調査した部分と、子どもたちと一緒に調査した部分、プレススクールで調査・交流した部分もある。なかには同日に行われたものもあり、子どもの体験としてもつながっているものである。

そこで、報告書の構成は、まず委員会の活動とノートの活動の項目を各々設け、次に伝統文化の実態調査、こどもの学習・発見の項目があり、その後プレススクールの項目という流れにした方が良くと思う。日程の流れも連動させた方がいい。

また、ノートがこれまで行ってきた教育のシステムに、関係機関をどのように巻き込み、歴史学習やお寺・農家等との関係をどのようにつないで拡大していくのかということを書くと分かりやすいかと思う。

さらに、新たな公に関する議論のなかで、NPO が中心にあり、関係機関と連動していくという図があると分かりやすいかと思う。

例えば、今日のプログラムについては、午前と午後の活動はつながっている。報告書としてもつなげて整理した方が良い。

新しい公共に関連する話だが、今後の拡大プログラムについては、総合学習のひとつのモデルとしてのシステムを提案してはどうかと思う。

杉 本： 来年度、再来年度の体制が見たい。次年度以降のビジョンは素晴らしいが、実際に誰がするのか決めることが大事である。教育委員会を巻き込む仕掛けや、巻き込むための定量的な見せ方が出来ないと、検討だけで終わってしまう。

また、再来年度にはどのように発展させているのだろうか。教育委員会を巻き込むとなると、市も動かざるを得なくなると思うため、報告書には、再来年度には教育委員会を巻き込むという書き方が良いのではないか。

平 井： 報告書をまとめることは大事だが、具体的な次元で、例えば里山カフェのターゲットが誰のためのものなのか見えないのが怖いと思っている。

小長谷： 主体が誰で、対象が誰かということがミソかと思う。しろあと歴史館や市職員の方がオブザーバーに入っているのであれば、ノートがポータルサイトを運営して、そこから関係機関のホームページや個別事業にリンクを貼るような入会地を作れば良いのではないか。

委員会がノハラボたかつき（ポータル）を運営し、高槻北部の文化を素材に総合学習のモデルを構築することをひとつの目的にして、他でも応用できるような普遍的な形で共有財産にした方が、教育委員会が入りこみやすいのは確かかと思う。

藤 本： 学校現場にプログラムを提案することは、学校現場で活用してもらえるようにした後、市民全体に対象を拡げていくための過程として位置づけられるのか。

小長谷： これまで子どもをメインの対象にしてきている。ただ、親御さんやシニアの方も勉強してもらえ形にしたら良いと思う。

一方で、カフェ・NPO の活動もやるということなので、ノハラボたかつき（ポータル）構想なりを立ち上げて、市にリンクを貼ってもらうと良いと思う。

教育的な活動の定量的効果の評価は難しいが、ポータルを立ち上げて充実してくれば、外からもやっているなということは見える。例えば、ポータルにアクセスや書き込みがあれば、学習効果があることは分かる。

パンフレット等の紙媒体にまとめようとしている活動の各成果を、著作権を付けて全てウエ

ブで公開すればよい。教育委員会など予算をつける側にも成果が見えやすくなる。

事務局： これまで子ども向けのプログラムに取り組んできたが、藤本先生が、本日の子ども向けのプログラムで子どもたちの中に入っていき姿を見てすごいと思った。

我々もそういった面を深くしていかないと、学校教育に入っていけないと感じている。

資料「次年度以降の本事業の取り組み方向について」では、フィールドが学校学習に広がった次の段階として、対象を市民に広げることについて言及している。

小長谷： ランチェスターの法則というものがある。大軍を相手に少ない兵で勝つには、局地戦にしないというものである。つまり、新しいことを始めるときには、はじめから手を広げすぎると失敗するということであり、これはベンチャーにも当てはまる。

ノートの実績は、子どもを対象に活動してきたということである。一方で、学校現場では総合学習がうまく出来ずに困っている。学校で総合学習をやるという方向性は良かったが時間削減になった。

よって、ノハラボたかつきが総合学習のモデルを開発し、学校の総合学習の空白を埋めていくことができるだけでも大成功になると思う。

一方で、シニアを対象とする生涯学習は子どもと違って大変かと思う。親や祖父母は、子どもが学べば自然に活動へ入ってくるかと思う。いきなり生涯学習に取り組むよりは、子どもを対象にした総合学習のモデルづくりに取り組むと書いてはどうか。そこから兄弟や父母、祖父母に市民学習を広げていくとすれば良い。

反対に、里山カフェについては、子どもだけでなく全世代を対象にした方が良いかと思う。

藤本： 学校、教育委員会を巻き込むというところまではできている。先ほどの質問は、学校、教育委員会を巻き込んだ次の段階として、生涯学習に繋がるのか確信を持たず質問させていただいた。

小長谷先生の話聞いて思ったが、開発したプログラムを質的に向上させていくためには、地域の多様な人材、地域の資源が豊かに絡み合うことが必要である。また、これによりプログラムの質だけでなく量的にも増えていく。

以上のプログラムを開発する過程するそのものが、生涯学習に広げていく道筋になるとすれば、面白いと思う。

小長谷： シニアのまちづくりをする際、シニアを弱者として、サポートする対象にすると失敗する。シニアが社会的役割を持ち、人を支えるような仕組みにすると成功している。教える立場として、シニアに協力してもらおうという形で家族を巻き込んでいくと良い。

平井： 子どもに対して教えるということも、子どもが自分以外の誰かに教えることが目的・着地点であり、まちのみんなが先生になるということが最終目的になれば、今までの話がすべて腑に落ちる。

そのためのサロンが里山カフェであるということになれば全てリンクする。

藤本： 学校現場の小学校教員は、まちのみんなが先生になりうるということを理解できていない。先生は自分であり、学校外に先生がいると思っていないから、教育のため地域に出て行こうとしないし、地域からも人が入って来ることが出来ない。

まちのみんなが先生であるという状態がゴールであり、それが了解できるようなプログラム、いや、了解せざるをえないようなプログラムにすれば、先生たちにも学校外に出て行くという意識が芽生えると思う。

中 川： わくわく探検隊は、芥川の源流域を探すプログラムにしても、座禅をするにしても、原で農業をやるにしても、何をやるにしても地域で各分野を一番知っている方に先生になってもらってきている。そういう意味では、わくわく探検隊は理想的なラインを来ているかと思う。

学校教育とどのようにすり合わせできるかということは、別問題もあるかと思う。今の取り組みは、子どもたちと自然体験をどのようにできるかというパイロットプログラムの4年目が終わったところで、寒天にまでたどりついた。

次のステップは山芋やイノシシなのかもしれないが、このようなパイロットプログラムに取り組んでいることがノートの強みであり、スタンスは学校教育と異なると考えている。

私から見たノートのすごいところは、子どもが動くまで待つということである。他のプログラムでもそうだが、子どもが飯ごう炊さんに動き出すまで待ち、5時間かけて取り組むというようなところが特徴だと思っている。

小長谷： 私は、藤本先生が言われたように、ノートの活動が学校教育と別と言うには惜しすぎると考えている。ノートの活動には、日本の教育で一番欠けた部分に当てはまる正解があると思う。

素材を与えて自らフィールドで答えを発見するという創造型のプログラムは世界中で取り組まれている。これからの日本の新しいモデルを作れば、極論を言えば、お膝元の高槻で採用されないとしても、他で採用されるということもあるかもしれない。

中川さんは山芋のことを言われていたが、今後の日本では農や食の教育が一番求められると思う。有機のものがどうやって作られて自分の口に入るかという教育などをやれば良い。

藤 本： 今日のプログラムに参加した子どものなかには、トコロテンがてんぐさから出来ていることを知っている子も何人かいた。

寒天を素材にしたプログラムを通して、子どもたちは今日取り組んでいることとまちとのつながりなど様々なことに気付いていた。子どもたちの発言を拾うと、どこへ運ぶという話から、海のものだから運ぶのかとか、保存食だから運べるのかというものがあつた。これらが理科や社会の勉強につながっていく。

プログラムをひとつのモデルとして、教育委員会は具体的にどう取り組めば良いのではないかという提案ができればよいと思う。

なお、教育現場に定量化はなじまない。結局アンケートなどでの評価になってしまう。評価は、活発さでなされるのではないか。活気があり、子どもの発言量等がたくさんあれば評価されるのではないかと思う。

また、例えば寒天を素材にしたプログラムに1回触れられれば、寒天ほど歴史的な深みがある素材はないとしても、別の素材に応用することが出来る。そこで良いプログラムを作り上げるには地域の方の協力が必要になる。これら“高槻の”教科書づくりに参画する人を増やすということが、生涯学習にもつながってくる。

学校に対しては、“高槻の”教科書を作れば、例えば、5年生の社会科の「物流」や、3年の社会科の「昔の暮らし」にも使える副読本になると提案すれば受け入れられるのではないかと思う。

また、今日のプログラムで子どもたちは色々な味の寒天を試したが、子どもは次の段階で食べてもらいたいと感じる。

子どもが、サロンである里山カフェの飾り付けなどを通して、子ども視点でまちの一部につながる場を豊かにするという体験をすることで、自分がまちのなかの一人であるという自覚が

出てくるのではないかと思う。

小長谷： システムは他の地域にも移転可能で、日本中の総合学習を充実させることが出来る。

藤 本： 子どもたちに、てんぐさから寒天になるまでの間の内容を書かせてみても面白いと思っている。

プログラム体験前には「てんぐさ」と書いて終わりだったのが、プログラム体験後には「運ぶ」という行為や「淀川」や「寒天小屋」や地域の名前、お世話になった方などの固有名詞が入ってくる。定量的ではないが、説得力はある。

小長谷： 子どもの夏休みの宿題などで、芥川沿岸の地図を作るとか、寒天のうまい調理法を考えてもらい、優秀作をホームページにアップするというのはどうか。

中学なら報告書にしてもらってもいい。負担があるとすればチーム学習にしてもいい。これらがホームページにアップされていけば活発さの指標になり、行政も評価するかと思う。

藤 本： 子どもたちの発言を聞いていると、歴史や地理を見ている子もいる。要は引き出し方かと思う。引き出し方とはプログラムの質である。

私のような大学の者が引き出すよりも地域の方が引き出した方がよりリアリティがある。ただ、地域の方は話すことが専門ではないため、地域の方との中間に入って話を引き出す人がいれば、もっと魅力を引き出せる。その面から言うと、総合学習を通してプログラムの質を上げるということは出来るかと思う。

小長谷： 地域の人が教えるということは、自分のなかで考えを整理することであり、自分が勉強することにつながる。

事務局： 総合学習のプログラムを学校の外部に委託するということはあるのだろうか。

藤 本： あるとしても材料代くらいではないだろうか。

杉 本： 事務局の話は課金についての話かと思う。我々の NPO では港区と山梨で包括協定を組んで課金の仕組みを作っている。私が得意としているのは仕組みづくり。

定量的な評価については、先ほどお話にあったヒット数等の話でよいかと思う。

営業ツールとしてどうやって見せるかが重要である。東京都の港区と豊島区で教育ファームに取り組んでおり、来年からの引き合いが多い。我々ができているのは、効果と安心・安全性の見せ方がうまいからである。

誰かがやめたら終わるのではなく、ちゃんと継続性を持たせられるよう、体制にこだわってほしい。来年度どこまでやるのかということを決めた方がよい。

小長谷： 「ノハラボたかつき」、「総合学習モデル」、「地域が先生」などのキーワードをブランド化して有名にしていくことが大事である。まずは今年度の活動記録をまとめて公開してはどうか。来年度からステップアップを図っていく。

藤 本： 現場の教員は、「良いな」、「やりたいな」という憧れがあるとしても、どうやっていいのかわからない。また、何の勉強になるのかと言う実感がない。

こうやればできるという方法と、実際には総合学習だけではなく、社会科や、図工のような内容など、様々な広がりがあることを伝えられれば、教師もイメージが湧くかと思う。

小長谷： ポータルをやる理由についてだが、高槻市の商工観光課、しろあと歴史館の名前が載れば、教育委員会から話が来ると思う。

杉 本： 藤本さんの話で気が付いたが、来年やることとしては、内容のテキスト化ではなく、指導者マニュアル化が重要かと思う。これは他でもやっていない。なお、内容のテキ

ストは公開してよいが、指導者マニュアルは公開してはいけない。

なんでそういうふうに言ったのかではなく、何を思ってそう言ったのかということを経験者マニュアルにすれば汎用性があり、財産になる。

小長谷： 地域の素材を生かした学習をどのように組み立てるかというシステムを構築すればよい。

藤 本： 教師には教科書があるが、児童との関係のなかで授業にしていくという作業は経験がないとできない。

杉 本： ポータルサイトのなかで、「大学」という名前を付けてはどうか。資料に記載のあるシブヤ大学で、コンセプトとして先生にお願いされることは、「自分が受けたい授業をしてください」ということだけである。

発想はシブヤ大学と近いので、せっかくポータルを立ち上げるのであれば、大学という名前を入れておけば、情報をつなげられるかもしれない。

(3) その他

小長谷： 委員会がどういうもので、委員会がどういう報告をしたという内容を盛り込んでもらえると良い。

中 川： 原地区から寒天が消えた理由は地球温暖化である。温暖化により、製造中の寒天が凍らず、腐らせる人が出てきた。現在タニチはフリーズドライで製造している。また、タニチは寒天の国内市場が縮小したため、ほとんど韓国から原料を輸入しているようである。

小長谷： てんぐさは国内で採れないのだろうか。

杉 本： 伊勢湾などで採れるはずである。

事務局： 来年以降の体制の話だが、事務局の想いとしては、今年度委員として参加いただいている方々には、来年度以降、直接プロジェクトに関わっていただきたいと考えている。既に平井氏にはデザインなどの形で協力いただいている。

藤本先生も初めて今回ご参加いただいたが、協働という形でプログラムに関わっていただきたいと考えている。

小長谷： 地域固有のものを打ち出すという点から言うと、顧客に合わせたマーケティングが重要である。若い世代、女性、お金と時間に余裕のあるシニアなどが楽しめるような商品開発が決め手かと思う。

今日の話で言うと、子どもの好みで黒蜜などもあるだろうし、外国の果物で新しい味覚というような話もあるかと思う。また、向日市の激辛商店街では、各店舗が一品激辛商品を置くことで、商店街の売上げが3割アップしている。おもしろいことに、スイーツを売るお店でクレール激辛などに客が多い。

藤 本： 学校の教員として自分でやりたいと思ったのは、「とことん高槻」というような取組である。今日のプログラムではトコロテンのトッピングとして黒蜜が好評だった。この全て原料を高槻産のもので追求して作ってみるといえることができれば面白いと思う。

以前、地産地消うどんという取組をしたことがあるが、単価がとても高くなってしまった。要するに食材がどこから来ているのか、それに付随する人とのつながりを追ったものである。

過程において、てんかすには原産地表示がなく、2回加工したのものには原産地表示が必要ないということに子どもは気が付いた。条件を満たすてんかすには出会えなかったが、子どもたちと話し合った結果、最終的には、まちの豆腐屋で作られているてんかすについて、「まちの

おっちゃんが作ったてんかすなら許せる」ということで、子どもたちは納得した。その時点で子どもには地域の一員としての自覚が生まれているということである。これは仕掛けである。

小長谷： 食と農のトレーサビリティは、今後勉強しなければならないし重要なことであるかと思う。トレーサビリティと矛盾はないが、本事業では食文化や地域文化に根ざしたものを取り上げると良い。

委員会が公共機関との意見交換する場を持つことは必要かと思う。特に地域の歴史の勉強については必要かと思う。食についても地域に根ざしたものについては必要かと思う。

藤 本： 地域の歴史を教えようと思うと、従来は「この地域にはこれがあって…」ということをつぶさくで教えがちである。

しかし、今日のプログラムでは、身近な寒天の体験を通して、寒天の向こう側に歴史がちょっとでも見えたという子が何人かいたかと思う。これは大事なアプローチであり、高槻型の提案ではないかと思う。

子どもははじめから高槻の歴史を知りたいわけではないが、結果として知っていく過程のなかで、もっと知りたくなるような仕掛けを、我々がどのように提案するかが重要になる。

小長谷： 中川さんのお店が（仮称）里山カフェと連携して、（仮称）里山カフェで食べた方は有機野菜を中川さんのお店で販売していると紹介したり、逆に中川さんのお店で有機野菜を販売した際に里山カフェを紹介するということもできるのではないか。

3. わくわく探検隊

(1) 火渡り体験

プログラム概要

目的

- ・子どもたちが地域の祭礼行事に参加することで、本地域独自の地域性について触れる機会を作る
- ・子どもたちが地域の祭礼行事に参加することで、その背景にある地域の歴史や文化について学ぶ

開催日・時間

2011年1月3日(月) 8:30~15:00

参加人数

児童22人 青少年8人

行程

- 8:00 集合(神峰山口バス停前)・徒歩出発
- 8:30 神峯山寺で初詣(トイレ休憩)・出発
- 10:00 本山寺到着
 - 「初寅会柴灯大護摩供」の見学 火渡りに挑戦、祝い餅の振る舞い
 - 「初寅くじ」に挑戦
- 12:00 昼食
- 13:30 本山寺出発
- 14:45 神峯山寺(トイレ休憩)・出発
- 15:30頃 解散(神峰山口バス停前)

プログラムで活用した文化財

神峯山寺

北摂三山寺の一つである天台宗の仏教寺院。山号は根本山。本尊は毘沙門天。新西国三十三箇所第十四番札所。役行者霊蹟札所。日本最初の毘沙門天安置の霊場と言われている。秋には紅葉の名所として知られる。

本山寺 「初寅会柴灯大護摩供」

北摂三山寺の一つである天台宗の仏教寺院。山号は北山。本尊は毘沙門天。鞍馬寺、朝護孫子寺とともに「日本三毘沙門天」とも言われている。毎年正月に行われる「初寅会柴灯大護摩供」では、山伏問答、法螺作法、斧作法、法弓作法、法剣作法、願文奏上、松明の儀式が行われる。

本山寺 「火渡り行事」

「初寅会柴灯大護摩供」の松明の儀式。無病息災を祈願して火の上を裸足で渡る儀式に一般も参加できる。最後には餅が撒かれ振舞われる。

アンケート調査結果

参加児童とその保護者を対象に、体験学習プログラムに参加した感想を尋ねるアンケート調査を実施しました。児童を対象にした質問欄では、絵日記形式で回答してもらいました。

(絵日記の一部)

名前	上村 たくお	2月5日(土) 天気	晴
やったこと	クイズラリー		
どうだった?	楽しかった		
頑張ったこと	クイズラリーでポイントがたまった。		
発見したこと	川が広がっていた。		
今日のことを絵日記にしよう!! (色もぬって書いてね)			
保護者の方からメッセージ			
楽しかったし、頑張ったのも学んだのも、 はじまりが、最後が、仲間は、楽しかった。 上村 拓武 母			

名前	生田 瑞希	2月5日(土) 天気	
やったこと	魚ハラレをしらべ		
どうだった?	楽しかったです。		
頑張ったこと	せんせい		
発見したこと			
今日のことを絵日記にしよう!! (色もぬって書いてね)			
保護者の方からメッセージ			

当日の様子



原を出発



神峯山寺の入口、勧請掛けも新しくなっていました



神峯山寺で初詣



本山寺では初寅くじに挑戦



初寅会柴灯大護摩供が進む様子を見学



護摩木に名前を書いて燃やしてもらいます



火渡り行事に挑戦、すさまじい煙でした



本山寺で記念撮影

(2) 原ハラ歴史調査隊 in しろあと歴史館見学と原ハラ歴史調査バトル

プログラム概要

目的

- ・子どもたちが楽しみながら地域の歴史資源に親しむ(=歴史資源の学習)
- ・従来よりも広いフィールドで原ハラ歴史調査バトルを実施することで、地域の方々にノートの活動を“見掛けて”もらう(=活動の周知)
- ・子どもたちの視点で地域の良さを発見する。(=地域資源の発見)

開催日・時間

2011年2月5日(土) 10:00~15:00

参加人数

児童 21人 青少年 11人

内容と進行イメージ

(内容)

名称	しろあと歴史館見学	原ハラ歴史調査バトル
時間	10:00~11:00	12:40~15:20
場所	高槻市立しろあと歴史館 (高槻市城内町1番7号)	高槻市原地区
概要	・企画展「原 八坂神社と蛇祭り」を見学し、わくわく探検隊のフィールドである原地区の伝統行事蛇祭り、寒天作り、原八景等について知る。 ・見学と同時に簡単なクイズも実施。	・子どもたちが班別対抗で、原地区の見どころを“調査隊”としてスタンプラリーのように競争しながら回り、楽しみつつ地域の歴史資源、食文化等について学ぶ。

行程

時 間	活 動 内 容	備 考
9 : 0 0	スタッフ集合 プログラムの最終確認	高槻市立しろあと歴史館前
9 : 4 5	子ども集合（受付・挨拶・諸注意など）	事務局の一部は、宝探し
10 : 0 0	しろあと歴史館入場 プログラム 「原 八坂神社と蛇祭り」見学	準備のため原地区へ移動
11 : 0 0	” 見学終了 しろあと歴史館出発（貸切バス乗車） トイレ呼びかけ	
11 : 3 0	神峯山口（バス停）到着 ～原公民館へ徒歩移動～	徒歩移動 約5分
11 : 4 0	原公民館到着後、昼食 プログラム 「わくわく探偵団！」	
12 : 4 0	プログラムの説明 原いっぱいマップ、記入シートの配布	
13 : 0 0	探偵活動スタート！	時間調整して委員出迎え
14 : 3 0	集合 解答発表、集計、表彰	
15 : 2 0	作文記入・終わりの会	
15 : 5 0	原公民館出発 ～神峯山口バス停へ徒歩移動～	徒歩移動 約5分
16 : 1 0	神峯山口出発（市バス乗車）	
16 : 3 5	JR 高槻北到着・解散（予定）	JR 高槻駅行き

プログラムで活用した文化財

体験学習プログラムには、以下の文化財を活用しました。また、文化財の活用にあたっては、青少年参加者が児童参加者の学習の「仕掛け」として、各文化財に関する「問題・指令」を検討し、プログラムへと反映しました。

No.	文化財	体験学習テーマ	問題・指令等
1	原公民館	わくわく探検隊	問題：みんなの探検隊の名前は？ 1．どきどき探検隊 2．わくわく探検隊 3．もりもり探検隊
2	八阪神社	蛇祭り	問題：八阪神社では、毎年原の人たちが（ ） でできた大綱で大蛇をつくり、弓矢で的に射る蛇祭りが行われています。
3	大森橋の下	石の重さを量ってみよう	指令：この石（河原にある石を指定）を持ち上げて、重さを考えよう！
4	寒天小屋	寒天	問題：昔、原では天草という海そうを使って寒天が作られていました。 寒天を作っていた建物の名前は？
5	畑中農園	畑中さんと写真撮影	問題：ここで売っている食べ物は何か？ 指令：畑中さんとみんなで集合写真を撮ろう！
6	牛地藏	牛地藏	指令：写真の牛地藏があるところを見つけて、牛地藏カードを持ってくること！ 牛地藏のところに行くヒントを、川東垣内の宮総代さんへお願い
7	わくわく畑	草抜き スタッフ関連クイズ	指令：袋いっぱい草を抜きまろう！ 問題：出題するとすれば2 / 5に決定
8	どこでも	お気に入りの場所の写真を撮ろう	指令：自分が一番お気に入りの原写真を撮ろう！ 一人一枚だけ撮影。

アンケート調査結果

参加児童を対象に、体験学習プログラムに参加した感想を尋ねるアンケート調査を実施しました。アンケート調査結果は以下のとおりです。

点数は 100 点満点

班	本日の 点数	点数の理由	一番がんばったこと	「しろあと歴史館」の感想
1	90	認定証しかくれなかったから	クイズラリー	いろいろあったのしかったけど、もうちょっと見たかった
1	80	不公平やった		楽しかった
1	85	クイズラリーで負けたから	クイズラリー	いろんなことをしれてよかった
1	99	なかなか見れないはいきょに行けたし、あそべたから	くさぬき	たのしかった
1	85	楽しかったけどビリだったから	けっこう勉強になった	けっこう勉強になった
2	89	筆箱がこわれたから	特になし	楽しかった
2	20	けい品がなかったから	調査隊	おもしろかった
2	100	よくできた	たんけん	たのしかった
2	90	とても楽しかったけどもっと遊びたかった	クイズラリー	とても楽しかった
2	1	結果発表で、2,3,4 位はがんばったのに何ももらえなかったから	ない	楽しかった
3	70	2 位以下も商品をもraitたい	草むしり	ふつう
3	62	なんとなく	クイズラリー	つまんなかった
3	50	くやしい	クイズラリー	ふつう
3	90	2 位いかでもけい品があるといい	クイズラリー	たのしかった
3	50	2 位のしょうひんはふつうあるだろう	どーでもいい	どーでもいい
3	85	つかれた	草取り	たのしかった
4	100	たのしかった	なし	どうでもいい
4	100	1 位だったからです	クイズラリー	おもしろかった
4	?	100 点以上だから	点数あつめ	いろんなことがわかってよかった
4	100	1 位になれたし楽しかったから	ざっそうとり	昔のことがまなべてよかった
4	100	みんなで協力してできたから	ざっそうとり	

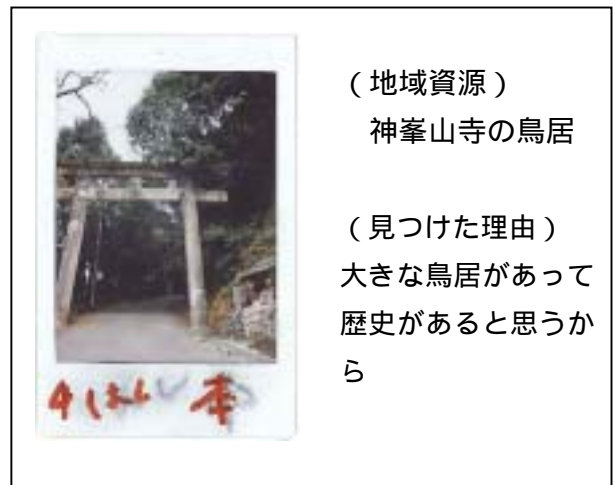
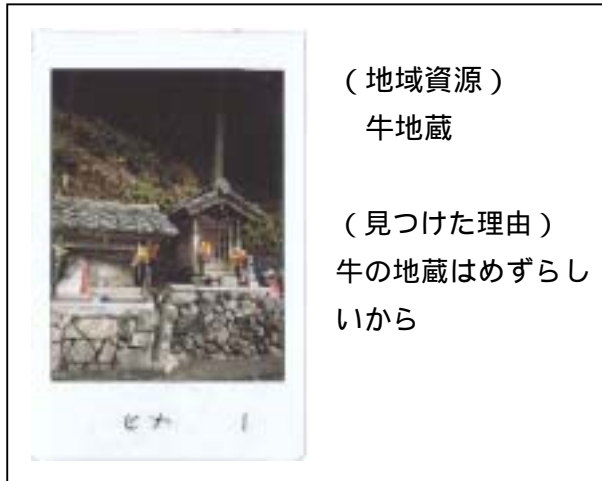
「クイズラリー」の感想	スタッフへひとこと	今日の感想
楽しかった	もっとアドバイスしてほしいかった	もっと遊びたかった
あめほしかった	不公平になるから全員にあめほしかった	あめほしかった
あまりたのしくなかった	ふこうへいだったのでもいやでした。みんなにあめほしかった	とてもたのしかったです
さがすのしんどかった	ない	ない
つかれた	特になし	クイズラリーはつかれたけどがんばった
面白かった	特になし	おもしろかったけどつかれた
楽しくなかった。つかれた。	もっとあそびたかった	3位だからけい品がほしかった
たのしかった	はよ	たのしかった
とても楽しかった	もっと遊んでほしいかった	クイズラリーやしろあと歴史観はとても楽しかった
いやだった	もっとほうしゅうがほしかった	クイズラリーをやるな
ふつう	しゃべって	楽しい
ふつう	次も来るからこいよ！	たのしかった
さいてい(けい品なくて)	2~4位のグループもけいひんがほしい	なし
たいへんだった		やまあるきがもうちょっとあるといい
どーでもいい	なし	どーでもいい
たのしかった	あそんでほしいかった	たのしかった
ふつう	なし	なし
写真もとれた	あそんでほしいかった。	たのしかった
見周りが楽しかった	また遊ぼうね	楽しかった きちょうな体験ができた
とてもつかれたけど楽しかった	もっとクイズがあったらな~とおもった	たのしかったし、いろんなことがわかって、とてもおもしろかった
みつけたときはうれしくてミッションもたのしかった。しゃしんもよくとれてよかった。	もっとうちらのちょうしにのってほしい。でもおつかれさまでした。	とってもたのしくできたと思います。ミッションもたのしかったです。ミッション系も好きだからまたやりたいです。

参加児童が発見した本地域の地域資源（文化財）

「原ハラ歴史調査隊 歴史調査バトル」では、参加児童がそれぞれ本地域内の「お気に入り」の地域資源を見つけ、ポラロイドカメラで収集するプログラムを組み込みました。

また、収集した地域資源を「なぜ気に入ったのか」を発表する時間を設けました。

参加児童が発見した本地域の地域資源に関する写真（一部）は以下のとおりです。



(3)原ハラ歴史調査隊 in 神峯山寺 と ところ天体験

プログラム概要

目的

- ・子どもたちが歴史資源の背景に関する学び、気付きを通して地域の歴史資源に親しむ

開催日・時間

2011年3月5日(土) 10:20~15:00

参加人数

児童 27人 青少年7人

進行イメージ

名称	(仮称)原ハラ歴史調査隊 in 神峯山寺	トコロテン作り体験
時間	10:20~11:05	11:40~12:30
場所	神峯山寺	高槻市原公民館
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・予めスタッフが、お寺の歴史資源を4つ程度ポラロイドカメラで撮影しておく。 ・子どもたちが班に分かれ、写真をヒントに、同じ場所(角度)を見つけて、写真を撮影してそのポイントにいるスタッフ(できるのであれば住職)からOKをもらう。 ・スタッフ(できるのであれば住職)が写真の場所は合っているか確認した後、OKであれば撮影した歴史資源について内容の説明をしていただき、説明の最後に子どもたちへ“キーワード”が記入されたカードをわたす。 ・キーワードは“テ”、“ン”、“ツ”、“キ”の4つ。 ・4つのキーワードを入手後、予め用意した「<input type="text"/>」の用紙にキーワードを貼ってもらい、一旦回収する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動後、午前に回収した用紙の答え合わせをした後、藤本先生から子どもたちへ、寒天に関する話をしていただく。 ・具体的には、高槻市山岳地域と海~山~川のつながりなどから、寒天の歴史的背景を子ども向けに紐解いていただく。 ・話が終わった後、班毎に、事前に用意した材料を使って、トコロテン突きを体験する。 ・昼食と同時にバイキング形式でトコロテンに好みの味付けをし、味わう。

行程

時 間	活 動 内 容	備 考
9 : 0 0	集合（受付・挨拶・諸注意など）	JR 高槻駅北口（ミスト前）
9 : 1 8	JR 高槻北出発（バス移動）	【バス移動 約 20 分】
9 : 4 0	神峯山口（バス停）到着	
9 : 5 0	神峯山寺へ徒歩移動	【徒歩移動 約 20 分】
1 0 : 1 0	神峯山寺到着	
1 0 : 2 0	探検プログラム 神峯山寺調査！！	
1 1 : 0 5	神峯山寺出発	
1 1 : 3 0	原公民館到着	【徒歩移動 約 30 分】
1 1 : 4 0	探検プログラム ところてん作り！ 原公民館でところてん作りをします。	エプロン、バンダナ 各自弁当持参ください
1 2 : 3 0	昼食	
1 4 : 0 0	終りの会	
1 4 : 3 0	原公民館出発 ～神峯山口バス停へ徒歩移動～	
1 4 : 4 6	神峯山口出発（市バス乗車）	【バス移動 約 20 分】
1 5 : 0 0	JR 高槻北到着・解散（予定）	JR 高槻北バスターミナル（ロッセリア前）

プログラムで活用した文化財

不動明王

神峯山寺の境内、九頭龍滝の裏にある不動明王。行者が修行を行う際の守り本尊として祭られている。



覆掛石

役行者の修行中に弁才天が姿を変えて現れ、修行の成果を確かめた後に去った際、その着物が覆いかけられていたといわれる石。



藍婆・毘藍婆

神峯山寺の本尊である毘沙門天の原木を守っていた鬼が姿を変えたものといわれる石。



お百度石

お百度参りの際に触れる石。



寒天

本地域の伝統産業。

天突き

寒天からところてんを作るために使う道具。ところてんから糸寒天を製造することができ、糸寒天は本地域の特産品として江戸時代から広く流通した。

アンケート調査結果

参加児童とその保護者を対象に、体験学習プログラムに参加した感想を尋ねるアンケート調査を実施しました。児童を対象にした質問欄では、絵日記形式で回答してもらいました。

(絵日記の一部)

名前	上村もも	3月5日(土) 天気	曇り
やったこと	とろろ作り		
どうだった?	おもしろかった		
頑張ったこと	とろろ作り		
発見したこと	とろろが冷めると固まる		
今日のことを絵日記にしてみよう! / (色をぬって書いてね)			
			
保護者の方からメッセージ			
おもしろそうだな、色を準備して頂きたいです。 上村拓武の母			

名前	古川 千穂	3月5日(土) 天気	晴
やったこと	トвороン作り ハラ系		
どうだった?	とろろがとろとろで柔らかい感じがした。		
頑張ったこと	とろろがとろとろになるまで		
発見したこと	とろろは冷めると固まる		
今日のことを絵日記にしてみよう! / (色をぬって書いてね)			
			
保護者の方からメッセージ			
今日は、おもしろい体験ができた。成長が感じられた。おもしろかった。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。 千穂の母			

名前	生田 瑞希	3月5日(土) 天気	
やったこと	とろろ作り		
どうだった?	おもしろかった		
頑張ったこと	とろろ作り		
発見したこと			
今日のことを絵日記にしてみよう! / (色をぬって書いてね)			
			
保護者の方からメッセージ			

また、「わくわく探検隊」全体に関する保護者への報告会において、以下のような感想もいただきました。

印象に残ったプログラム

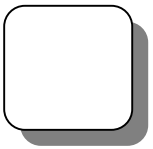
- ・ トコロテン作りが楽しかったから。
- ・ とにかく楽しかったようです（笑）もちつきは今の時代なかなか体験できないので、親としても良い経験をさせて頂いたと思っております。
- ・ 初めての体験だったので。
- ・ もちつきをする機会がないので、つきたての美味しいお餅に感動しておりました。
- ・ 親としては『ア』が貴重な体験だったと思います。子どもは『ウ：もちつき』が一番楽しかったと話しています。
- ・ もちつきが楽しかったし、スタッフと一緒にいっぱい遊べたことが良かったそうです。
- ・ きっと本山寺火渡りに参加していればもっと衝撃的だったのでしょうかね。残念ながら参加できませんでした。・もちつき大会のお餅は持ち帰って時間が経ってもおいしかったです。
- ・ もちつきができたこと、いっぱい食べれたこと。・午後からの河川敷で遊ぶのがゆったりとした時間でリーダーと一緒にいっぱい遊べたから。
- ・ 火渡りやお餅まきなど、初めてのことができて面白かったのだ。
- ・ もちつきはもちろんですが、スタッフの皆さんやお友達と体を動かして思いっきり遊べたことがとても楽しかったようです。
- ・ もちをついたりするのがおもしろかった。

児童が体験プログラムの参加後に変わった点など

- ・ これまで母と一緒になければ宿泊を伴う場所へは行こうとしなかった息子でしたが、英語 DE キャンプで自信をつけ、1人でもいろいろなイベントに参加する様になりました。また、高学年のお兄さん達と遊ぶのが楽しく、わくわく探検隊の行事を心待ちにしています。
- ・ とにかく人見知りや協調性がなかったのが、ほんの少しですが前向きになったような気が致します。
- ・ 小学校での林間や田植えなどの時役立った。
- ・ 特にはありませんが（若干たくましくなった??）
- ・ 自然に関心を持ち、たくさんの知識を得たようです。
- ・ 嫌がらずに野外活動に参加できるようになって、その楽しみ方がわかるようになってくれたこと。回を追うごとに自分で進んで持ち物の準備などをし、プログラム内容にも興味を持って目を通すようになった。
- ・ 大荷物を文句も言わず持ち歩くようになった。ランドセルを軽いと言うようになった。
- ・ ・積極的に事に取り組むようになった。・知らない人の中でも恥ずかしがるのが少なくなった。
- ・ アウトドアが前よりも好きになったこと。
- ・ 初めて出会う人、初めて行く場所、初めて経験すること、この1年は”初めて”づくしでした。そんな”初めて”に自分一人でもチャレンジしよう！やってみよう！という積極性が出てきたように思います。

その他感想など

- ・ 高槻市は広いので、市の東部に住んでいると原地区へ出掛けることはなく、「わくわく探検隊」に参加させていただいたおかげで、親子共高槻の良さを再発見しました。来年度もよろしく願い致します。
- ・ この一年とてもいい経験をさせて頂き感謝しております。わが子のようになかなか人の輪に入れないような子にもう少し目を向けて頂ける幸いです。又、機会があれば参加させて頂きたいと思います。本当に一年間ありがとうございました。
- ・ 泊まりをもっと多くして欲しいです。
- ・ 子供達へ貴重な体験をありがとうございます。町中では学べない学校では教えてくれない経験ができる「わくわく探検隊」、とても素晴らしいと思います。長く子供達のために続けていてもらいたいです。
- ・ 都会に住んでおりますので、自然に触れる機会を持って、親子ともども喜んでいきます。広い所で走り回り、持て余した体力を発散させてるようです。特別プログラムでいいのですが、ポンポン山登山に連れて行って下さい。
- ・ スタッフが皆若いというだけで、少し不安になる点もありましたが（プロフィールなどの照会があってもよかったかも）毎回楽しんで参加していたので良かったと思います。これをきっかけに未知の体験にも臆さずチャレンジする子どもになって欲しいです。
- ・ 子供の面倒（しかも大勢）とても大変だったと思います。本当にありがとうございました。
- ・ 今後も長く続けていて下さい。川に環境や生物多様性保護の話にもひろげられたら。・保護者にもプリントか何かで高槻全体の農業や自然環境について目を向けてもらえるよう、PR していった方が良いのでは？子供任せで大人があまり農業や環境について知る機会が少ないように思います。
- ・ 毎回楽しそうにイベントに参加をし、帰ってきたらたくさん話をしてくれたので「わくわく」に参加させてよかったと思います。
- ・ ケーブル TV のニュースで数年前に「わくわく探検隊」の事を知り、子供が3年生になったら絶対に参加させたい！思っていました。子供達のためにいつも一生懸命なスタッフの方々の背中お見えて、親子共にたくさん大切なことを教えていただき、勇気をいっぱいもらいました。本当に本当にありがとうございました。



今後の取り組み方向

1. 将来ビジョン

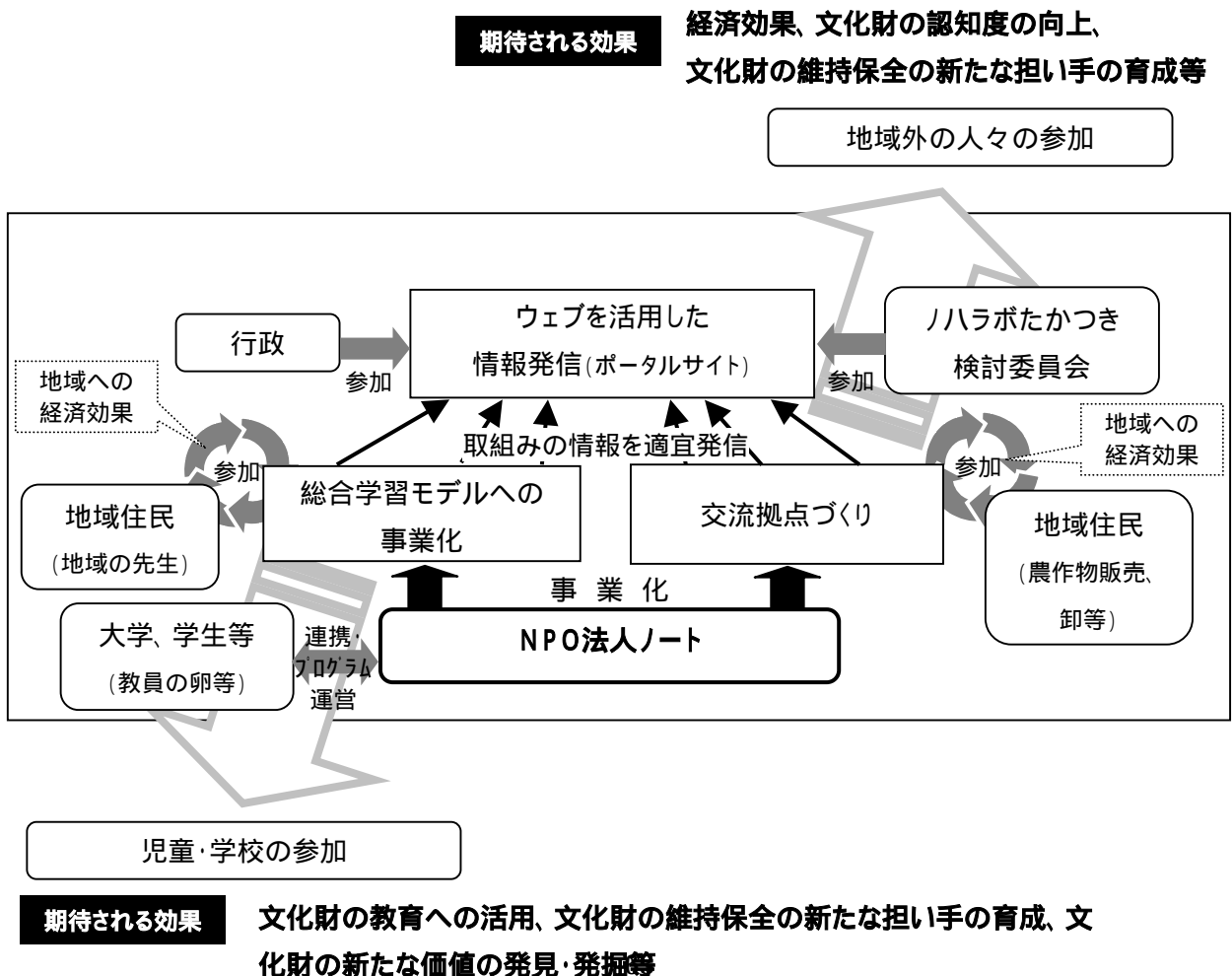
高槻市北部地域を「生涯学習」の場に

本事業を通じて、本地域の文化財（地域資源）を「学び遊ぶ」体験学習プログラムを開発・提供することに対しては、児童をはじめ、青少年やその保護者の世代からもニーズがあることが確認できました。

また、地域住民をはじめとした地域の人々が体験学習プログラムの「先生」として参加することにより、伝統的な祭礼や生活文化をはじめとした本地域の文化財の維持・保全の新たな担い手として、地域外の人々が支援できる可能性が広がることもわかりました。また、地域住民等が、体験学習プログラムの「先生」となれる仕組みを整えることにより、地域への経済効果や地域コミュニティの活性化等につながる可能性があります。

そのため、NPO 法人ノートでは、本事業で実験的に実施した体験学習プログラムの開発・提供を続けるとともに、それらに地域住民や地域外の人々が参加していける「仕組み」を整えることに力を注ぎ、本地域における文化財の活用を、市民ムーブメントとして発信していきます。具体的には、NPO 法人ノートがプロデュースする体験学習プログラムに関わる人が、地域で学ぶ「生徒」になったり、「先生」になったりして楽しむ場を形成し、「ずっと卒業しない＝地域に関わり続ける」多様な人々のネットワークを形成していきます。また、そのための「サロン」として、交流拠点づくりにも取り組みながら、本地域全体がいわば「生涯学習の場」として活用されることを目指します。

（将来ビジョンのイメージ～本地域の文化財を維持・保全・活用するための仕組み～）



2. 活動方向

本事業の実験的な取り組みを通じ、子ども・青少年の教育効果を高める、地域活性化につなげることを、NPOノートの本地域における今後の活動の活動方向として設定することとしました。

また、継続性の確保と活動の広がりに向け、ウェブを最大限活用したプロモーション戦略を展開していくことも活動方向として設定しました。

(1) 子ども・青少年への教育効果を高める

～総合学習モデルへの事業化～

教科の枠を超えた横断的・立体的学習、食育等身体感覚を通じた学習（豊かな体験を通じた道德教育も）のできる体験プログラムを提供し続け、市内の学校教育のカリキュラムの一貫として活用いただけるよう、「総合学習モデルへの事業化」を目指します。

(2) 地域活性化につなげる

～交流拠点づくり～

地域資源を活用した体験学習プログラムの「先生（インストラクター）」として地域住民に参画してもらうことにより、地域伝統文化に対する誇りを再認識していただくことを目指します。体験学習プログラムを実施し、地域住民と地域外の人々が交流する地域の「サロン」として、本地域における交流の場を形成していきます。交流の場では、地域資源である本地域の農作物等の提供・販売等も行い、外部の人々と交流しながら経済効果も得ていくような場を日常的に形成することを目指し、コミュニティの活性化と地域経済の活性化の両立を図ります。

(3) ウェブを最大限活用したプロモーション戦略の展開

～ノハラボたかつき ウェブサイトでの情報発信～

本事業の文化財を活用した取り組みを、地域ムーブメントとして打ち出すため、一連の取り組みに「ノハラボたかつき」というニックネームをつけて、広く外部に発信します。

「ノハラボたかつき」ウェブサイトでは、本地域にある膨大な地域資源に関する情報を広く市民が親しめるようにするための仕掛けとして、ウェブGIS導入による学習ツールなどの開発を検討していきます。

3. 具体的な取り組み予定と対応する課題

(1) 次年度以降の取り組み予定

「わくわく大学」の実施による人材育成及びモニタリング調査

参加した児童（またはスタッフ）が「インストラクター」となり、児童や大人に地域資源について紹介する体験学習プログラムを実施していきます。

地域住民の方に「先生」として参加していただき、本地域内の歴史や文化財に関する体験学習・サロン（交流・語り合い）等を行っていきます。

なお、本年度の体験学習プログラムのターゲットは、児童・青少年が中心でしたが、次年度以降は、その保護者等も参加できるような仕組みを検討し、より「生涯学習のできる地域＝わくわく大学」として活動に広がりが出るようにしていきます。

高槻市山岳地域の伝統文化活用事業計画の検討

本事業で開催した委員会を継続し、NPO法人ノートの作成する事業計画に対してアドバイスをいただきます。また、体験学習プログラムの企画・実施にあたって、検討委員メンバーには、引き続き参画いただきます。

高槻市山岳地域の文化財の体験的学びに関するテキストの作成

体験学習プログラムの実施を通じて得られた、高槻市山岳地域の文化財の「親しみ方」について、総合的に紹介するテキストやホームページのコンテンツを作成し、「ノハラボたかつき」として広くPRしていきます。

(2) 次年度以降対応していく取り組み課題

総合学習モデルの事業化に向けた教育委員会・大学との連携

体験学習プログラムを、総合学習の場で活用いただくために、教育委員会との連携を検討していきます。また、体験学習プログラムをより教育効果の高いものへとしていくために、本事業に参画いただいた武庫川女子大学 藤本講師等の協力を得ながら、大学との連携によるプログラム開発も行い、学校現場での活用効果の高いものを作り上げていきます。

人材育成に向けた体験学習プログラムの運営マニュアル化

体験学習プログラムの提供にあたって、スタッフの役割を担う青少年等が自主性を持ちながら参加し、かつ質の高い内容を提供していけるように、運営マニュアル化を行います。マニュアル化にあたっては、運営を行うスタッフ自身の学習・成長にもつながるように配慮していきます。